

大阪学院大学

国際学論集

第28巻第1・2号 2017年12月

論 説

19世紀末の東アジアにおける戦略拠点の獲得とイギリス －巨文島占領と威海衛租借との比較から－	尾崎 庸介—— 1
ニコライ 2 世の日記 1917－1918年	広野 好彦—— 25
会員業績.....	65

大阪学院大学国際学学会

19世紀末の東アジアにおける戦略拠点の獲得とイギリス －巨文島占領と威海衛租借との比較から－

尾 崎 庸 介

The Acquisition of Strategic Bases and Britain in East Asia during the Late Nineteenth Century: A Comparison of the Occupation of Port Hamilton and the Lease of Wei-hai-wei

OZAKI YOSUKE

ABSTRACT

The most important feature of the international politics during the late nineteenth century was Anglo-Russian antagonism from Near East to Central Asia. Great Britain acquired Hong Kong through the Treaty of Nanking, a peace treaty that ended the Opium War of 1840-1842. Britain subsequently developed it into the strategic base in East Asia, thereby increasing their interest in China. However, Russia's gradual increase of influence in China during the late nineteenth century forced Britain to acquire a new stronghold.

In 1885, after the Panjdeh Incident in Afghanistan, the British Government ordered the China Squadron, the Royal Navy in East Asia, to occupy Port Hamilton (Komundo), a small group of islands off the southern coast of the Korean Peninsula, to confront Russia in April of 1885. However, to resist the British invasion, Russia took some countermeasures, such as the prospective occupation of Port Lazaref on the North-East coast of the Korean Peninsula. Thus, the relations between Britain and Russia became such that the slightest provocation could have triggered a war in East Asia. However, when the antagonism between the two nations in Afghanistan was settled, Britain decided to withdraw from Port Hamilton. Furthermore, Russia ceased its unyielding stand against Britain and their clash in East Asia was avoided.

Nevertheless, nearly a decade later, Russia took advantage of the German occupation of Kiaochow Bay and leased Port Arthur and Dalian. Britain,

threatened that Russia would expand its political and military muscles in China, shifted its focus to China and leased Wei-hai-wei, a city in the eastern Shantung Peninsula, for maintaining the balance of power in China.

In this thesis, I examined the following three similarities between the 1885 occupation of Port Hamilton and the 1898 lease of Wei-hai-wei: the British policy towards Russia, the difference of views between the British government and commanders and local officials, and the Anglo-Japanese relations. I believe that a comparison of these similarities will provide a better understanding of the specific characteristics of international politics in East Asia during the late nineteenth century.

はじめに

アヘン戦争の講和条約である南京条約において、イギリスは香港を獲得した。その後、香港は東アジアおよび西太平洋における戦略拠点として重要視され、発展していった¹⁾。その結果、イギリスは中国における圧倒的な商業権益を獲得することにも成功した²⁾。しかし、19世紀後半、東アジアにおけるロシアの影響力が次第に強まってくると、イギリスは自国の商業権益を維持するためにこれまでの政策を見直す必要に迫られた。戦略拠点が香港のみであるという状況下においては、その距離などを鑑みると、イギリスが東アジアにおいてロシアに対抗することには限界が見え始めていたからである。そのため、イギリスにとって香港以北にさらなる戦略拠点を獲得することが急務となっていた³⁾。

1880年代になると、アフガニスタンにおける英露の緊張が東アジアにも波及することとなった。それはイギリスにとっては望まざることであった。しかし、1885年4月、イギリスは朝鮮南岸沖の巨文島 (Port Hamilton) の占領を決定し、東アジアにおいてロシアへの対決姿勢を強めた。これに対して、ロシアも一時朝鮮東岸の永興湾 (Port Razaref) の占領を画策するなどの対抗策を打ち出し、1885年に東アジアにおいて英露は一触即発の状況に陥った。しかし、その直後、イギリス政府は巨文島からの撤退を決定すると、ロシアも対決姿勢を弱めた。2年後の1887年、イギリスが巨文島から撤退すると、東アジアにおける英露の緊張状態は沈静化した。東アジアにおいて、英露の衝突の可能性は少なくなったが、イギリスには戦略拠点の不足という大きな課題が依然として残ったままであった。

その10年後の1897年、山東省におけるドイツ人宣教師殺害事件をきっかけにして、ドイツが膠州湾を占領、租借すると、ロシアもドイツに倣って

-
- 1) Kwong Chi Man and Tsoi Yiu Lun, *Eastern Fortress: A Military History of Hong Kong, 1840-1970* (Hong Kong: Hong Kong University Press), 2014, pp.3-4.
 - 2) 拙稿「1890年代におけるイギリスの東アジア政策と中国戦隊—中国戦隊フリーマン・トルからみた日清戦争—」(『政治経済史学』第512号、2009年)、1～2頁。
 - 3) Kwong and Tsoi, *Eastern Fortress*, p.4. 例えば、香港から上海までは1,303km、仁川までは1,915km、ウラジオストクまでは2,655kmである。

念願であった旅順・大連を中国から租借した。これに対して、イギリスも新たな戦略拠点獲得を熟慮した結果、翌年、威海衛の租借を決定し、いわゆる列強による中国分割を招いた。

イギリスの巨文島占領と威海衛租借については、様々な研究がなされてきた。例えば、巨文島占領に関しては、G・A・レンセン（George A. Lensen）⁴⁾ が朝鮮半島と満州をめぐる国際関係史の大著の中で詳細に論じているほか、日本においても小林隆夫⁵⁾ が研究の成果を世に問うている。威海衛租借についても、イアン・ニッシュ（Ian Nish）が威海衛租借とイギリス海軍についての論文を⁶⁾、日本においても、高橋守雄⁷⁾ がイギリスの威海衛租借についての論文をそれぞれ発表している。

東アジアにおける新たな戦略拠点としての巨文島占領を断念したわずか10年後、なぜイギリスは威海衛租借を決定したのであろうか。巨文島占領と威海衛租借については、とりわけその獲得過程において多くの類似点が見られるが、これらを比較検討するような研究はほとんど見られない⁸⁾。

これらを鑑みて、本稿では、これまでの研究および刊行史料、一次史料などを利用して、巨文島占領と威海衛租借についてのいくつかの類似点を見つけ出し、これらを比較検討してみたい。それによって、19世紀末のイ

4) G. A. Lensen, *Balance of Intrigue: International Rivalry in Korea and Manchuria, 1884-1899* (Tallahassee: University Press of Florida, 1982).

5) 小林隆夫『19世紀イギリス外交と東アジア』（彩流社、2013年）。そのほか、日本においては、安夢弼「イギリスの巨文島占領事件1885～1887年」（『経済論集』（大東文化大学経済学会）第26号、1977年3月）、姜範錫「巨文島事件とその後－バックスプリタニカの落日と東アジア－」（『広島国際研究』（広島市立大学）第5巻、1999年）がある。また、巨文島事件について、拙稿「巨文島事件をめぐるイギリスの東アジア政策（Ⅰ）－1880年代の東アジア国際政治とバランス・オブ・パワー－」（『政治経済史学』596号、2016年8月）、「巨文島事件をめぐるイギリスの東アジア政策（Ⅱ）－1880年代の東アジア国際政治とバランス・オブ・パワー－」（『政治経済史学』597号、2016年9月）の内容を一部利用した。

6) Ian Nish, "The Royal Navy and the Taking of Weihaiwei, 1898-1905" (*Mariner's Mirror*, 54), 1968.

7) 高橋守雄「イギリスの威海衛租借について」（『西洋史研究』第6号、1960年10月）。

8) 上述のレンセンの研究は、巨文島事件と中国分割の双方について触れているが、これら二つの事例の類似点や相違点についての言及は十分とは言えない。

ギリスの東アジア政策の本質を理解することできるのではないだろうか。また、19世紀末の東アジア国際政治とヨーロッパ国際政治との間に連動性が生まれてくる過渡期であったことを考えると、イギリスによる巨文島占領と威海衛租借をめぐる政策を比較検討することによって、19世紀末の国際政治の本質そのものについても把握することができるのではないかと考える。

一 巨文島占領と威海衛租借の類似点①—東アジアにおける対ロシア政策としての側面

（一）対ロシア政策としての巨文島の占領

1870年代になると、東アジアにおけるロシアの脅威がイギリスにとって現実のものとなり始めた。イギリス国内でも、そのような状況に警鐘を鳴らす人々が現れはじめた。例えば、のちに海軍理論家としてイギリス海軍戦略に多大な影響を与えることとなったフィリップ・コロン大佐（Philip Howard Columb）はその一人であった。コロンはウラジオストクの将来性と潜在性について、ロシア政府がウラジオストクの開発に消極的であるという現状ではイギリスの脅威にはなりえないと判断していた。一方で、彼はロシアが政策転換を図り、積極的なウラジオストクの開発をおこなって、商業的拠点として発展させれば、ロシアはそこを拠点として朝鮮や中国北部に大きな影響力を行使することもありうると考えていた。またウラジオストクを開発しない場合であっても、朝鮮半島に進出して拠点を獲得した場合には、イギリスにとって、当時の消極的な東アジア政策が弱点になり得ると憂慮していた⁹⁾。

現場からの意見はより切迫していた。1875年7月、イギリス海軍中国戦隊司令官アルフレッド・ライダー（Sir Alfred Philip Ryder）は、ロシアの

9) Ian Nish(ed.), *British Documents On Foreign Affairs, Part.1, Series E, Asia, 1860-1914, Volume 1, Korea, Japan and North-East Asia, 1860-1878* (University Publication of America, 1993), Memorandum on the Russian Settlement of Vladivostok, Doc.305. (以下、*BDOFA, vol.1*と略記)

南下政策以外にも日本やドイツの艦船による朝鮮周辺の調査など、イギリスにとって東アジアにおける懸案が増えていることから、東アジアにおける現実的な政策として、巨文島の占領を海軍省に提言した¹⁰⁾。ライダーは、現状ではイギリスの使用している「上海の海軍工廠、横浜の倉庫は海外の土地であり、戦時には使用できない」という弱点を持っていることから、「中国、日本、ロシア、他国と戦争が起こった場合には、貯炭庫、兵器庫、病院、工廠を兼ねた作戦基地を持つことは、われわれにとって決定的な重要性を持つ」と考えていた。彼は「冬に凍らないだけ十分に南方に位置し、中国、日本、ロシアにすぐにアクセスでき、かつ防衛も容易にでき、港を守ることができることがふさわしい」ことを作戦基地の条件として挙げ、それに合致する場所として、巨文島を海軍省に推薦した。彼は「もし巨文島を恒久的に占領するならば、将来的にこれらの海域におけるイギリスの権益にとってもかなり優位になるだろう」と自らの見解に自信を持っていた¹¹⁾。しかし、イギリス政府は東アジアにおけるロシアの存在をそれほど大きな脅威とはとらえておらず、巨文島占領については消極的な対応に終始し、実際に占領することはなかった。

1885年4月、中央アジアにおいてロシアとアフガニスタンが衝突した。いわゆる「グレートゲーム (Great Game)」によって、英露は中央アジアにおいても対立していたため、このロシアの行動が、当時インドを有していたイギリスを大きく刺激することとなった¹²⁾。上述のように、1870年代以降、東アジアにおいてもロシアの南下政策がイギリスにとって懸案となりつつあったため、中央アジアにおけるロシアの行動は、イギリスの東アジア政策にも多大な影響を与えることとなった。

10) Ian Nish (ed.), *British Documents On Foreign Affairs, Part.1, Series E, Asia, 1860-1914, Volume2, Korea, the Ryukyu Islands, and North-East Asia, 1860-1878* (University Publication of America, 1993), Sir Harry Parks to the Earl of Derby, 25 July, 1875, Doc.2. (以下、*BDOFA*, vol.2と略記)

11) *BDOFA*, vol.2, Vice-Admiral Ryder to the Secretary to the Admiralty, 20 July, 1875, Doc.12.

12) Sneha Mahajan, *British Foreign Policy, 1874-1914* (London and New York: Routledge, 2002), pp.75-76.

その結果、イギリス政府は1870年代にも一時検討された巨文島の占領を決定した。1885年4月15日、海軍省の指示を受けたウィリアム・ダウエル（Sir William Montagu Dowell）中国戦隊司令官は巨文島占領を実行に移した。これは、イギリス政府が東アジアにおいてロシアと徹底的に対抗し、譲歩はしないという意思表示でもあった。

(二) 対ロシア政策としての威海衛の租借

1895年までに、ドイツの対中貿易の規模は、イギリスに次ぐ規模にまで成長しており、ドイツにとって中国周辺に海軍基地、貿易集積地を獲得することが急務となっていた。実際に、1895年4月、ホルマン（Friedrich von Hollmann）海相は中国北部の舟山群島と中国南部の厦門、膠州湾と大鵬湾、朝鮮南岸沖の諸島と澎湖諸島という、中国海域の北部と南部における戦略拠点の候補地を選定した¹³⁾。

1897年になると、ドイツが中国や朝鮮半島で軍事拠点を獲得するような何らかの行動を画策しているという噂がいくつか飛び交うようになった。同年11月1日、山東省で2名のドイツ人宣教師が反キリスト教の秘密結社の中国人に殺害される事件が起こった。同月6日、この報に接したディーデリヒス（Otto von Diederichs）ドイツ東洋戦隊司令官は膠州湾を占領するための行動を起こすようドイツ政府に要請した。ヴィルヘルム2世自身もこの宣教師殺害事件を好機ととらえて、膠州湾占領することを決定し¹⁴⁾、同月14日、ディーデリヒス率いるドイツ中国戦隊は膠州湾を占領した。

アーネスト・サトウ（Ernest Mason Satow）駐日公使は、宣教師殺害事件からドイツ海軍による膠州湾占領までの過程があまりにもスムーズであったため、ドイツの行動に疑念を持っていた¹⁵⁾。アレクサンダー・ブラー（Sir Alexander Buller）中国戦隊司令官もドイツが棧橋や兵舎、貯蔵庫な

13) Lensen, *Balance of Intrigue*, pp.707-8.

14) Terrell D. Gottschall, *By Order of the Kaiser: Otto von Diederichs and the Rise of the Imperial German Navy, 1865-1902* (Annapolis: Naval Institute Press, 2003), pp.156-7.

15) FO46/485/245, Sir Ernest Satow to the Marquess of Salisbury, 1 December, 1898.

どを建設しており、石炭の備蓄も始めていることから、ドイツの膠州湾占領が恒久的なものになりそうであると警告した¹⁶⁾。現地の外交官や海軍司令官などはドイツのこの行動が中国におけるイギリスの商業権益を損なう可能性と列強による海軍基地獲得の呼び水になることを懸念していた。しかし、トマス・サンダーソン（Sir Thomas Sanderson）事務次官が「ドイツの膠州湾は重大な事件ではない。なぜならほかに石炭補給地がないから、そこだけでは大して役に立たないからだ」とこの問題について述べているように¹⁷⁾、イギリス外務省はさほど重要な問題であるとは考えていなかった。フランク・ラッセルズ（Sir Frank C. Lascelles）駐独大使も「私の知っている限り、イギリス政府はドイツの船が膠州湾に向かうことに反対はしない」とドイツのビューロー（Bernhard von Bülow）外相に伝え¹⁸⁾、イギリス政府がこれ以上膠州湾問題に干渉しないことを表明した。

東アジアにおける不凍港の獲得が悲願であったロシアは、ドイツの膠州湾占領という絶好の機会を利用して、即座に自らも東アジアにおける不凍港の獲得に動いた。ロシアのムラヴィヨフ外相は、不凍港の候補として現地の副領事の報告から大連湾をニコライ2世（Nicholas II Aleksandrovich）に推薦した。11月26日のロシアの御前会議において、不凍港の獲得をめぐる意見の衝突があったが、最終的には、12月11日にニコライ2世が旅順の占領を許可することとなった。12月15日、ロシアの艦隊は旅順に入港し、旅順・大連の占領を実行に移した¹⁹⁾。

上述のごとく、ドイツの膠州湾占領に対しては、一貫して消極的な対応をとってきたイギリスであったが、ロシアが旅順・大連を占領したとの報

16) PRO30/33/6/10, Buller to Satow, 26 December, 1898.

17) Ian Ruxton (ed.), *The Diaries of Sir Ernest Satow: British Minister in Tokyo 1895-1909, A Diplomat Return to Japan* (North Carolina: Lulu Press, 2010), pp.223-4. アーネスト・サトウ（長岡祥三訳）『アーネスト・サトウ公使日記Ⅰ』（新人物往来社、1989年）、305-306頁。

18) *British Parliamentary Papers, China 23, Correspondence respecting Foreign Concessions in China, 1898-99* (Ireland: Irish University Press, 1971), No.39. （以下、BPPと略記）

19) 麻田雅文『中東鉄道経営史－ロシアと「満洲」1896－1935』（名古屋大学出版会、2012年）、199-202頁。

を受けると、その態度を大きく変えざるを得なくなった。12月17日には、マクドナルド (Sir Claude Maxwell MacDonald) 駐清公使が「5隻のロシア艦が清国政府から旅順港で越冬することを認められている」と報告した²⁰⁾。ロシア艦隊の動向を探っていたブラー司令官は艦船を旅順港へと派遣し、ロシアによる占領の状況を調査した²¹⁾。

ロシアのムラヴィヨフ外相は、ロシアの行動について、「かつては日本の港でたくさんの艦船を越冬させていたが、それが困難になったためロシア艦は旅順口に向かったというものだった」と釈明して、イギリス側に理解を求めた²²⁾。その一方で、「イギリス艦の行動はロシアではイギリスとの戦争の噂を立てるには十分に非友好的なものとして考えられており、結果としてロシア大使がこの問題に関してソールズベリ閣下に友好的な精神において抗議をするよう指示を受けた」とイギリスの行動を批判した²³⁾。この批判に対して、ソールズベリは「私には入港する条約の権利のある湾にイギリスの艦船がいることに不満を言う理由がわからない」と²⁴⁾、ロシアの対応に不信感を抱いた。

ロシア側の当初の弁明は、越冬のために旅順港に滞在するということであった。しかし、1898年3月7日にマクドナルドから「ロシアがドイツの膠州湾租借と同じ条件で大連湾と旅順の租借を、また旅順までの鉄道の特権を要求した」との電報が入ると²⁵⁾、ソールズベリは

ドイツの膠州湾租借と同じ条件で、ロシアが旅順口や大連湾を租借すれば、清国政府に対するロシアの影響力はイギリス政府の影響力に損

20) BPP 23, Sir C. MacDonald to the Marquess of Salisbury, 17 December, 1897, No.22.

21) Ian Nish(ed.), *British Documents On Foreign Affairs, Part.1, Series E, Asia, 1860-1914, Volume 6, Japan and North-East Asia, 1890-1899* (University Publication of America, 1993), Admiral Sir A. Buller to Admiralty, 3 January, 1898, Doc.300. (以下、*BDOFA*, vol.6 と略記); BPP 23, Sir C. MacDonald to the Marquess of Salisbury, 20 December, 1897, No.23.

22) BPP 23, Mr. Goschen to the Marquess of Salisbury, 23 December, 1897, No.28.

23) BPP 23, Sir N. O'Connor to the Marquess of Salisbury, 19 January, 1898, No.61.

24) BPP 23, The Marquess of Salisbury to Sir N. O'Connor, 12 January, 1898, No.48.

25) BPP 23, Sir C. MacDonald to the Marquess of Salisbury, 7 March, 1898, No.96.

害を与えるほど大きくなるだろう。だから、われわれにとって対抗策を取るのにもってこいだと思う。最善の計画は、日本による威海衛の割譲に関して、ドイツに認めたものと同じ条件でそこを租借する優先権を主張することである

として、イギリスがロシアへの対抗措置として威海衛を租借することを決定した²⁶⁾。

二 巨文島占領と威海衛租借の類似点②—現場と政府の見解の乖離

(一) イギリスにおける巨文島占領についての賛否

イギリスが巨文島占領した理由は、ノースブルック (Thomas Baring Northbrook, 1st Earl of) 海軍大臣の覚書の中に見ることができる。ノースブルックは、地政学的見地から、巨文島が朝鮮半島を統制しうる位置にあること、ロシアの東アジアにおける戦略拠点であるウラジオストクを攻撃する際には前線基地になり得ること、ロシアの南下を憂慮している日清両国がイギリスを支援してくれるだろうと、巨文島占領には多くの利点があると考えた。

さらにノースブルックは

ロシアは巨文島周辺にいくつかの基地を探していることが考えられるので、もしわれわれがこの島を占領しなければ、ロシアが代わりに占領することは十分に起こりうることである…私の意見では、将来的なロシアとの不和が続く限り、巨文島の占領はわれわれを不利な状況にすることはないだろう。というのは、われわれがとても容易く現在の北方にあるロシアの港を攻撃もしくは封鎖することができる場所だからである

26) BPP 23, The Marquess of Salisbury to Sir C. MacDonald, 7 March, 1898, No.95.

と、巨文島占領に至った経緯を説明した²⁷⁾。

しかし、上記のノースブルックの覚書のなかでも、恒久的な巨文島占領に疑義が唱えられていることへの言及がなされているように、巨文島占領に関しては、当初から各方面からの否定的な見解が多かった。たとえば、巨文島占領後すぐの4月28日の議会において、庶民院のジェームズ・オケリー (Mr. James O'Kelly) 議員がグラッドストーン (William Ewart Gladstone) 首相に対して、英露関係を考慮したうえで巨文島からの早期撤退の意思があるのかどうか尋ねた²⁸⁾。

加えて、巨文島占領に対する否定的な声は現場からも多くあがっていた。5月18日、巨文島の实地調査を行っていたダウエル司令官は、巨文島の状況について詳細に報告した。彼は巨文島の占領が一時的なものであると確信していた。彼は巨文島の占領が防衛上の観点から望ましいものではないこと、要塞化するためには膨大な費用がかかることから現実的ではないことなど、恒久的な占領はするべきではないとの見解を海軍省に報告した²⁹⁾。実際に、メーレンドルフ外交顧問や朝鮮の役人がイギリスによる巨文島占領の状況を調査しに来た際、ダウエルは彼らに対して「〔イギリスによる〕占領が一時的なものであると信じている」と伝えた³⁰⁾。

5月末には、ダウエルは巨文島からの早期撤退がふさわしいことを確信するようになった。巨文島に駐留していたマクレア海軍大佐らからの報告として、巨文島の防衛には、500人規模の砲兵隊をはじめとした守備隊の駐留、砲台の建設、最低3隻の魚雷艇、1隻のコルベット艦、2隻の砲艦が必要不可欠であり、このような増派をしてもなお敵艦が積極的な攻撃をしてきた場合には危険にさらされることになるだろうと巨文島の問題点を

27) *BDOFA*, vol.2, Memorandum of Lord Northbrook, 20 May, 1885, Doc.146. ノースブルックのこの覚書は、巨文島に関する研究書や論文の中では必ずと言っていいほど使用されている。

28) *Hansard, Parliamentary Debates*, 4th series, vol.297, c969.

29) *BDOFA*, vol.2, Vice-Admiral W. Dowell to the Secretary to the Admiralty, 18 May, 1875, Doc.189.

30) ADM125/86, Vice-Admiral and Commander-in-chief W. Dowell to the Secretary to the Admiralty, 19 May, 1885, NO.212.

海軍省に指摘した³¹⁾。

フランシス・プランケット (Sir Francis Plunkett) 駐日公使³²⁾ は、イギリスによる恒久的な巨文島の占領には肯定的な意見を持っていたが、その一方で巨文島占領において大きな問題点があるとの見解も外務省に伝えていた。彼の指摘した問題点とは、すなわち、イギリスが巨文島を占領することによって、その対抗策としてロシアが朝鮮周辺における領土を獲得する可能性があること。巨文島の占領を維持するには、周囲に物資の補給を頼らざるを得ないこと。要塞化に莫大な費用がかかってしまうこと。巨文島の防衛には小規模の中国戦隊ではあまりに困難で、現状では中国戦隊の通常任務に支障をきたしていること、などであった³³⁾。

同年にはダウエルに代わって新たにリチャード・ハミルトン (Sir Richard Vesey Hamilton) が中国戦隊司令官となったが、彼もまたイギリスによる巨文島占領には否定的であった。彼は着任してすぐに巨文島の視察をおこない、上級士官らと巨文島について綿密に協議をした。

そのうえで、12月7日、彼は巨文島について、

- ① 地理的観点から、巨文島は複数の出入り口を有しているため、敵海軍の包囲および攻撃を受けた場合、中国戦隊を分散させて各出入り口を防衛しなければならず、その防衛が極めて困難になること、
- ② 中国戦隊はあまりにも小規模であるため、現状では中国戦隊のみでの巨文島防衛は不可能であること、
- ③ ウラジオストクが毎年4か月氷に閉ざされ、4か月濃霧に覆われるため、6か月はロシア艦隊がウラジオストクを利用しないため、対ウラジオストクの拠点として巨文島はあまり意味をなさないこと、

31) ADM125/86, Confidential, Vice-Admiral and Commander-in-Chief W. Dowell to the Secretary of the Admiralty, 28 May, 1885.

32) プランケットは、ハリー・パークスの後任として、1884～7年まで駐日公使を務めた。日本におけるパークスの影響力を考えるとプランケットの影は薄いが、その後の条約改正に向けて大きな影響を与えた。Hugh Cortazzi (ed.), *British Envoys in Japan, 1859-1972* (Folkestone: Global Oriental, 2004), pp.53-62.

33) FO46/330/151, Very Confidential, Mr. Plunkett to Earl Granville, 25 May, 1885.

などの問題点・欠点を報告した³⁴⁾。ハミルトンからの報告書に基づいて、海軍省はハミルトンの見解が海軍的視点からとても重要であり無視できないものであることを外務省に伝え、以後巨文島の放棄をほのめかすようになった³⁵⁾。

このように、ダウエルとハミルトンという二人の中国戦隊の司令官は巨文島の現場を調査した結果、彼らは戦略基地として巨文島が不適格であると考えていたが、イギリス政府は巨文島が戦略拠点としてふさわしいとの判断を下し、占領の継続を決定した。これは現場と本国の意見の相違がある中で、あくまで巨文島占領が本国主導で行われたことを示すものであるといえる。占領直後、海軍省は巨文島に司令部を設置し、港湾用機雷や防材なども設置して巨文島の複数の水路を封鎖するよう命じ、小規模の中国戦隊でも効率的に防衛できる環境を整えた。さらに、巨文島・上海間をつなぐ海底電線の設置にも着手し、対ロシアの前線基地として、巨文島の要塞化を着々と進めていった³⁶⁾。

しかし、占領から一年もたたないうちにイギリス政府は巨文島の維持に消極的になっていった。それは海底電線への対応から確認することができる。巨文島の防衛においても、ロシアの行動を監視するためにも、情報のやり取りをするための海底電線は重要であった。この巨文島・上海間の海底電線は設置後まもなく故障したが、海軍省はこの修理費用への支出を拒否し、その後故障を放置したままであった³⁷⁾。

イギリス政府が巨文島の占領継続に消極的になっていった背景には、アフガニスタンをめぐる英露の対立が次第に収束、沈静化してきたこと、かつ清仏戦争の終結によって、東アジア情勢も安定しつつあったことなどが挙げられる。いずれにせよ、現場と本国の間で巨文島占領をめぐる、当

34) ADM125/86, Confidential, Vice-Admiral Hamilton to the Secretary of the Admiralty, 7 December, 1885.

35) *BDOFA*, vol.2, Confidential, The Secretary to the Admiralty to Sir P. Currie, 19 March, 1886, Doc.261.

36) *BDOFA*, vol.2, Vice-Admiral W. Dowell to the Secretary to the Admiralty, 2 June, 1885, Doc.154; *BPP* 5, Earl Granville to Mr. O'Connor, 27 April, 1885, No.11.

37) *BDOFA*, vol.2, Doc.261.

初は両者の意見は大きく乖離していたが、次第に本国が現場の見解を受け入れていった。このように、イギリス政府が迅速な要塞化を行ったのは占領直後のみで、以降の巨文島政策は非常に消極的なものに変容していった

(二) イギリスにおける威海衛租借についての是非

1898年1月初旬、マクドナルド駐清公使はブラー中国戦隊司令官に対して、渤海湾における港の占領についての意見を求めた。ブラーは旅順、大連、海洋島などが目的にかなった場所であるだろうが、イギリスと中国にとって最適なのは、揚子江河口の舟山群島をイギリスが領有することであると考えた³⁸⁾。また、ロシアが旅順・大連を期限付きで領有しそうであることが判明すると、2月下旬には、中国海関を通じて、中国が威海衛をイギリスに譲渡するための予備交渉を持ちかけたが、イギリスは時期尚早であるとしてこれを断った³⁹⁾。

3月9日、外務省はロシアの旅順占領に対する海洋島の戦略的価値についての評価を海軍省に求めた。海軍省は、海洋島がドイツの膠州湾には対抗できるかもしれないが、ロシアの旅順占領には対抗できないと返答した。なぜなら、海洋島では、2～3隻の艦船しか収容できないほど停泊場所が脆弱であったからである⁴⁰⁾。これらを勘案して、候補地として最後に残ったのが威海衛であった。

しかし、威海衛については、租借の候補として挙がった時点から租借に疑義を唱える声が存在していた。その一つは、威海衛の租借がドイツとの関係を悪化させる可能性があることへの危惧であった。イギリスが威海衛を租借することは、膠州湾を占領しているドイツを必ず刺激することになる。東アジアにおいてイギリスのライバルとなる国はロシアであり、ドイツと敵対的な関係になることを望む声は少なかった。

また現地の中国戦隊のフィッツジェラルド副司令官が、威海衛の港が狭

38) Arthur J. Marder, *The Anatomy of British Sea Power: A History of British Naval Policy in the Pre-Dreadnought Era, 1880-1905* (London: Frank Cass, 1940), p.305.

39) Nish, "The Royal Navy and the taking of Weihaiwei, 1898-1905", p.45.

40) Marder, *The Anatomy of British Sea Power*, p.309.

すぎることを、それゆえに近代的な戦艦の停泊港としては限定的なものになるとその欠点を報告し、マクドナルドも威海衛の適正に懸念を抱いていた。海軍省も、威海衛について、

- ① 冬季と春季において、(威海衛の)湾が強い北東の風にさらされていること、
- ② 東側の出入り口がとても狭く、戦艦は西側からしか入港できないこと、
- ③ 劉公島沖にある停泊所が、小規模の艦船が停泊するくらいしか余地がないこと、

など、威海衛の戦略拠点としての価値について疑問視していた⁴¹⁾。

3月19日、ソールズベリの病气により、代理で外交に当たっていたバルフォア (Arthur James Balfour) は、ロシアが遼東半島の租借を決定したことに對してイギリスは次の二つの行動のうちどちらかを選択しなければならぬと主張した。

- ① 既存の条約の権利を保持し、(おそらくこれはむずかしいだろうが) 旅順の要塞化を抑えることを約束することを条件として、ロシアが旅順を租借することを認めて、イギリスがバランスをとるために、威海衛を租借すること、
- ② ロシアに旅順の租借を抑えるよう要求すること、それを引き換えにして、イギリスが渤海湾に港を持たないで、満州地域に干渉しないことを約束すること、

であった。バルフォアは、「旅順の領有は中国政府に対するバランス・オブ・パワーを変えるだけではなく、極東におけるイギリスの状況を悪くす

41) T.G.Otte, "Wee-Ah-Wee?": Britain at Weihaiwei, 1898-1930', Greg Kennedy (ed.), *British Naval Strategy East of Suez, 1900-2000* (London and New York: Frank Cass, 2005), pp.8-10.

るだろう」との認識を持っていた。なぜなら、旅順が天然の良港であり、容易に難攻不落の港に改良できるような潜在力のある要塞になり得ると考えていたからである。一方で、その対抗策、すなわち威海衛を対ロシア戦略の拠点とするには防衛のためにかなりの軍事力が必要とされ、彼は要塞化されても旅順に対抗し得ることができるのかどうか疑問視していた。しかし、二つ目の選択肢を選択すれば、ロシアの南下と中国分割を阻止できるかもしれないが、それはロシアとの衝突を招く可能性もあるとの認識を持っていた⁴²⁾。ロシアと軍事衝突をしてまで、ロシアによる旅順租借を阻止するという考えはバルフォアには毛頭なかった。バルフォアの威海衛についての認識は、戦略的拠点というよりはむしろ、中国政府に関与することが容易な場所という程度のものであった⁴³⁾。

最終的にソールズベリは、バルフォアの考えた一つ目の政策を選択した。彼は「イギリス政府は不凍商業港の租借と現在建設中のシベリア横断鉄道との鉄道の連結に関して不満を持っているわけではない」と、ロシアが商業港として旅順を租借することには反対しない旨をオコーナー(Nicholas R. O'Connor)駐露大使を通してムラヴィヨフ外相に伝えた。しかし、中国政府への永続的な脅威となり中国分割を促すものになることを理由に、旅順を軍港化することは控えるよう要求した。その譲歩案として、イギリスが満州地域に関心を持たないことを約束した⁴⁴⁾。

ムラヴィヨフは、旅順の占領がロシアにとって非常に重要であり、ドイツや日本に対して認められたことが、ロシアに対しては認められないということはおかしいことであり、これに反対しているのはイギリス政府だけであるとして、ソールズベリの提案に真っ向から反論した。そのうえで、ムラヴィヨフは旅順と大連が通商と軍艦のために開港されるだろうと述べた⁴⁵⁾。

42) G. P. Gooch and Harold Temperley (ed.), *British Documents on the Origins of the War, 1898-1914, Vol. I, The End of Splendid Isolation* (London: H.M.S.O., 1927) Mr. A. J. Balfour to Sir C. MacDonald, 19 March, 1898, No.32. (以下、BDと略記)

43) Otte, "Wee-Ah-Wee?": Britain at Weihaiwei, 1898-1930, p.10.

44) BD, The Marquess of Salisbury to Sir N. O'Connor, 22 March, 1898, No.36.

45) BD, Sir N. O'Connor to The Marquess of Salisbury, 23 March, 1898, No.37.

ソールズベリは中国にこれ以上の領土や港を持つことに消極的であったが、「ロシアへの旅順の譲渡は渤海湾のバランス・オブ・パワーを実質的に変える」と判断し⁴⁶⁾、最後に残った対抗策として威海衛の租借をすることを決定した。

三 巨文島占領と威海衛租借の類似点③—東アジアにおける日本の存在

(一) 巨文島の占領と日本

イギリスが巨文島を占領する際、十分な配慮をした国の一つが日本であった。なぜなら、イギリスが巨文島を占領し、前線基地とするためには、その後方基地・補給地が必要不可欠であり、その重要な候補が日本だったからである。

占領後間もない4月17日、グランヴィル (Granville Leveson-Gower, 2nd Earl of Granville) 外相は、現状ではイギリスによる巨文島占領を日本側には秘密にするようにプランケット駐日公使に前置きしながらも、ダウエル司令官から巨文島を占領したという報告を受けたらすぐに、その事実を日本側に伝えるよう指示した⁴⁷⁾。プランケットは即座の日本への対応について「われわれが (巨文島の) 占領について日本に知らせることは、日本に対するイギリスの友好的な感情を示すわれわれの強い希望の証明」であると考えた⁴⁸⁾。

グランヴィル外相の指示を受けたプランケットはイギリスが巨文島を占領した事実を速やかに井上馨外務卿に伝えた。井上はイギリス政府の好意ある行為に納得する一方で、日本が良好な関係を持つ列強によって近隣の場所が占領されることに無関心ではいられないと返答したが、表立って巨

46) *BD*, The Marquess of Salisbury to Sir C. MacDonald, 25 March, 1898, No.39.

47) *BDOFA*, vol.2, Confidential. Ext.5, Earl Granville to Mr. Plunkett, 17 April, 1885, Doc.136.

48) *BDOFA*, vol.2, Mr. Plunkett to Earl Granville, 23 April, 1885, Doc.152.

文島占領に異を唱えることはなかった⁴⁹⁾。しかし、井上は巨文島占領によって英露関係が悪化して戦争に発展し、それが日本にまで飛び火することを憂慮していた。この井上の懸念に対して、プランケットは可能な限り日本に十分配慮することを伝え、万が一英露間で戦争が勃発した場合には、イギリスが巨文島という作戦行動の基地を獲得することは、イギリスだけではなく日本の利益にも合致することであるとイギリスによる巨文島占領の必要性を強調した⁵⁰⁾。

プランケットと同様に、グランヴィル外相もイギリスによる巨文島の占領の事実を速やかに河瀬真孝駐英公使に伝えた。グランヴィルはこれらのイギリスの対応によって日本政府は巨文島の一時的な占領を承認するだろうと確信していた⁵¹⁾。

5月10日には、オコーナー駐清代理公使からプランケット宛に、日露両国が協力をしてイギリスの巨文島占領に異議を唱えるために清国に圧力をかけようとしていること、加えて榎本武揚駐清公使を中心にして日本が北京でなんらかの反英的な行動を起こそうと画策しているとの電報が届いた。オコーナーからの日本に対する警戒についての電報は、その後もプランケット宛に届いたが、プランケットは井上との会談のなかから、日本政府が中国で反英的な行動を起こすよう命じている事実はなく、イギリスによる巨文島占領に公式に反対をしていないと認識していた。プランケットは、むしろ井上の言動にはイギリスのへの配慮が十分にみえるので、オコーナーからの情報は中国で異議が生じたことを証明するものであり、日本にはそのような意図はないとダウエル司令官やグラヴィル外相に報告し、オコーナーの主張に異議を唱えた⁵²⁾。

井上が最も憂慮していたことは、イギリスが巨文島を占領したことを口実に、ロシアがこれに対抗して朝鮮半島のどこかの港を占領するかもしれ

49) *BDOFA*, vol.2, Confidential, Mr. Plunkett to Earl Granville, 23 April, 1885, Doc.137.

50) FO46/329/121, Confidential, Mr. Plunkett to Earl Granville, 27 April, 1885. 文中の括弧は筆者が加筆。

51) *BDOFA*, vol.2, Confidential. Ext.6, Earl Granville to Mr. Plunkett, 23 April, 1885, Doc.139.

52) FO46/331/158, Very Confidential, Mr. Plunkett to Earl Granville, 5 June, 1885.

ないということであった。なぜなら、ロシア側がイギリスが巨文島から撤退しなければ、イギリスが占領した十倍の領土を併合することを周囲に吹聴したからである⁵³⁾。井上の懸念は、ロシアが朝鮮半島に進出することがさらなる呼び水となって、ヨーロッパ各国がこぞって軍事力を行使して、日本周辺の領土にも関心を抱き、占領することにつながりかねないというところにあった。井上は「ロシアや他の列強からの金銭的な補償では、日本は周辺の島嶼を放棄するようなことをしないだろう…もし何らかの試みが日本周辺の島嶼になされたら、日本は戦うことを決断する」と日本の強い決意をプランケットに内密に伝えた⁵⁴⁾。

プランケットは、井上の発言から、日本がロシアの脅威を十二分に感じている現状では、東アジアにおいて日本がロシアと協力する可能性は限りなく低いと判断した。「ロシアによる朝鮮への南下は日本と同様イギリスにも関心のあること」という認識の下で、彼はイギリスによる巨文島の占領の目的がロシアの朝鮮半島への進出を阻止することにあり、日本にとって友好的で攻撃的でないイギリスのような国に配慮することは日本の国益にも適うものであることを繰り返し述べた⁵⁵⁾。その後も井上はプランケットとたびたび会談を行うなかで、井上はイギリスとの良好な関係を維持したいという姿勢はより明確にした⁵⁶⁾。

1886年8月、ロシアのシェスタコフ海軍大臣がロシア艦モスクワで横浜にやってきた。この訪問に関して、プランケットは「シェスタコフ海軍大臣が日本政府に探りを入れる目的でヨーロッパから到着したが、日本がイギリスに対してかなり好意を持っていることを認識したので、コレラの流行もあって、可能な限り早く滞在を切り上げた」とロシアに対して良好な日英関係を印象付けたことを外務省に報告した⁵⁷⁾。このように、イギリス

53) FO46/331/173, Very Confidential, Mr. Plunkett to Earl Granville, 23 June, 1885.

54) FO46/332/176, Very Confidential, Mr. Plunkett to the Marquess of Salisbury, 3 July, 1885.

55) Ibid., 23 June, 1885.

56) FO46/332/23, Confidential, Mr. Plunkett to the Marquess of Salisbury, 14 July, 1885.

57) BDOFA, vol.2, Confidential, Mr. Plunkett to Earl of Iddesleigh, 30 August, 1886, Doc.304.

の巨文島占領をめぐっては、東アジアにおける脅威がロシアであるという認識が日英両国で完全に合致した。

(二) 威海衛の租借と日本

イギリスが威海衛を租借する方針を固めてから、最も配慮したのは日本との関係であった。なぜなら、イギリスが租借する前の威海衛は、日本が日清戦争の賠償金支払いの担保として占領していたからである。

ソールズベリは、日本が撤退した後の威海衛について、日本政府がどのように考えているのかを、サトウ駐日公使を通じて探った。1898年3月26日、サトウは「中国が威海衛を維持できないのであれば、日本はイギリスが威海衛を占領することを望むだろう」と、日本がイギリスの威海衛租借には反対しない可能性が高いとの感想をソールズベリに伝えた⁵⁸⁾。同月31日、ソールズベリは

ロシアによる旅順の領有が渤海湾におけるバランス・オブ・パワーを大きく損ねるので、日本が威海衛を撤退した後に、われわれは中国政府から同等の条件で威海衛の租借を要求せざるを得なくなっていることを日本政府に極秘で知らせなさい。しかし、われわれはこの日を急ぎたくはない。われわれが共通の利益になると信じている提案が日本政府によって顧慮されるだろうということをあなたの情報から推察した。われわれは彼らの同意と支援（their concurrence and support）を得られるだろうと信じている

とサトウに打電した⁵⁹⁾。

サトウを通じてソールズベリの意向を知った西徳二郎外相は、

日本政府はイギリス政府が日本軍撤退後の威海衛を中国政府から租借することに対して同意（concurrence）を表明する。

58) *BD*, Sir E. Satow to The Marquess of Salisbury, 26 March, 1898, No.40.

59) *BD*, The Marquess of Salisbury to Sir E. Satow, 31 March, 1898, No.45.

将来的に、日本政府がいつ何時今後自国の防衛を強化するか、もしくは自国の利益を促進するために同様の政策を行うことが必要な場合には、日本政府はイギリスが同意と支援 (concurrency and support of the British Government) を与えてくれることを確信している

とサトウに返答した⁶⁰⁾。日本側の返答が「同意と支援」ではなく、「支援」という言葉が抜けており「同意」のみの表現にとどまったこと、一方でイギリスには「同意と支援」の両方を求めたことについて、ソールズベリ首相は日本側の真意を図りかねていたが、サトウは日本側の発言が複雑化している国際情勢に巻き込まれることを極力避けようとしているのであり、他意はないだろうと日本側の立場をソールズベリに代弁した⁶¹⁾。ソールズベリもこれ以上このことに疑義を申し立てることはなく、イギリスの威海衛租借をめぐる一連の日本政府の対応が友好的なものであり、非常に満足 of いくものであったと加藤高明駐英公使に感謝の意を伝えた⁶²⁾。

一方で、良好な関係を維持したいのは日本政府も同じであった。加藤は、威海衛をめぐる日本のイギリスへの対応がこれまでの消極的なものから一歩進んだことを高く評価しており、日本の国益のためにはイギリスとの関係をもっと進展させるべきであると西外相に力説した⁶³⁾。5月11日、外務省からの指示を受けた加藤は「日本軍は5月7日から4週間以内に威海衛を撤退するだろう。そして、駐留する日本軍のために威海衛に建設された兵舎や他の建物が清国政府に引き渡されるだろうということを、日本の駐清公使は清国政府に知らせるよう指示された。それらの建物はイギリス軍が自由に使用すべきであるとの条件が付いている」とソールズベリに伝えた⁶⁴⁾。

威海衛の要塞化に大きな予算を割くことができないイギリスにとって

60) 『日本外交文書』第31巻第1冊、371文書。BD, Note Verbale, 2 April, 1898, No.46.

61) BD, Sir E. Satow to The Marquess of Salisbury, 4 April, 1898, No.48.

62) 『日本外交文書』第31巻第1冊、381文書。

63) 『日本外交文書』第31巻第1冊、379文書。

64) 『日本外交文書』第31巻第1冊、401文書。BPP 23, The Marquess of Salisbury to Kato, 11 May, 1898, No.85.

は、日本軍が建築した兵舎やその他の建物をそのまま引き継いで使用することは願ってもないことであった。日本側の対応に対して、ソールズベリは「私はあなたの情報に感謝を伝え、イギリス政府は日本政府の友好的な行動に大変感謝をしているということを言いたい」と加藤に伝えた⁶⁵⁾。

日本軍撤退後、日本軍が建築し、使用していた建物は、中国戦隊の兵士たちが使用することとなった。シーモア（Edward Hobart Seymour）中国戦隊司令官は、日本軍が明け渡した威海衛での兵舎が状態と清潔さがかなり良好であると分かったこと、イギリス海軍の士官や兵士たちが使用するのためのたくさんの調度品が残されていたことの大きな感銘を受けた。彼は日本当局によるこの思慮深い思いやりのある行動に対して、しかるべき部署にふさわしいと思われる感謝の意を伝えるようサトウに求めた⁶⁶⁾。イギリスが威海衛を占領して以降、威海衛の引継ぎを通して、日英間の良好な関係はより強くなっていった。

おわりに

これまで見てきたように、イギリスによる1885年の巨文島占領と1898年の威海衛租借の経緯を考察すると、対ロシア政策としての側面、政府と現地間での認識の乖離という側面、対日関係の側面など、多くの共通点があることが確認できた。これは、1885年から1898年にかけてのイギリスの対東アジア政策がある程度の一貫性を持っていたことを示すものであるといえるだろう。

しかし、1885年の巨文島占領と1898年の威海衛租借における決定的な相違点があることも見逃してはならない。それは、1885年から1898年までの間に、東アジア国際政治が変容していたということである。すなわち、イギリスによる1885年の巨文島占領は、同時期に清仏戦争はあったものの、東アジアへのロシアの影響力をいかにして削いでいくかということだけを念頭に入れておけばよかった。結果的には、イギリスが巨文島事件を通じ

65) BPP 23, The Marquess of Salisbury to Kato, 15 May, 1898, No.107.

66) BPP 23, Sir E. Satow to the Marquess of Salisbury, 11 June, 1898, No.231.

て断固たる態度をロシアに見せつけることによって、中国におけるその圧倒的な権益を維持するという目的を果たすことができた。

それに対して、1898年の威海衛租借は、1885年の巨文島占領と同様に、中国におけるロシアの影響力を削ぐことが主眼であったが、その対応は後手に回ったものであった。結果的には、ロシアの旅順・大連の租借を防ぐことはできず、中国におけるロシアの影響力はそれまで以上に増加することとなった。また、何よりも重要なことは、複合的な要因があったということ、すなわちドイツの膠州湾占領・租借に触発されて、ロシアが旅順・大連を租借し、それに対抗する形でイギリスが威海衛を租借することになったということである。

本稿では触れていないが、周知のように、その後、フランスも広州湾を占領した。イギリスにとっての1898年前後の東アジアは、1880年代までのロシアだけを念頭に入れておけばよかった時代から、ロシアだけではなくドイツなど新たな脅威にも対処しなければならない新しい時代へと変容していく転換期であった。中国におけるイギリスの地位が相対的に弱体化していき、もはやそれまでの中国における圧倒的な権益を維持することができないことが認識されるなかで、イギリスの東アジア政策が再検討され、新たな政策を模索していくことになるきっかけともなったといえるだろう。

ニコライ 2 世の日記 1917－1918年

広 野 好 彦

The Diary of Nicholas II, 1917-1918

HIRONO YOSHIHIKO

ABSTRACT

Nicholas II, the last emperor of Russia, was widely known for keeping diaries almost every day. The purpose of this article is to describe the February revolution, his abdication, and the confinement after that, mainly relying on his diaries. But generally, they contain concise descriptions of his public and private life. We can seldom find what the last tsar thought at that time. Therefore, other historical materials, including the memoir of the French ambassador in Russia (1914-1917), Maurice Paléologue and so on, are used to make up for this defect.

Until the revolution broke out, Nicholas II had rejected the demand of political parties in Russia and also Allied Powers to organize a kind of the parliament system to effectively mobilize all the resources to the World War I. He persistently insisted that the principle of autocracy must be preserved. At the same time, he did not listen to the criticism that the bad reputation of Rasputin, the friend of the emperor and empress, had eroded his rule. At the last moment, he abdicated not for his son, the crown prince but for his brother. Because he did not want to be separated from his son, because of his hemophilia.

After the abdication, he and his family had lived for about a year and a half under the house arrest in Tsarskoye Selo, Tobolsk, and Ekaterinburg. He had been interested in the war. He hoped the victory. So, he got very angry

at the signing of the separate peace with Germany. He feared that the Bolshevik government might force him to approve it. But he did not write in the diary what had been wrong with his rule in detail.

はじめに

拙稿は第一次世界大戦期におけるロシア皇帝ニコライ 2 世（Николай Александрович Романов）の日記読解の作業の一環である。1917-18年という時期に即せば、皇帝の目から見た、2月革命、退位、その後の拘束された生活の記録の解説である。また先年発表した彼の妻アレクサンドラ皇后（Александра Фёдоровна）の日記に関する拙稿の補完でもある¹⁾。

ニコライ日記の特徴はその簡潔さにある。日記に現れるのは、皇帝としての多忙な日々における日々の行動、出来事、出会った人物等の列挙である。彼の考えや思いが記されることはまれである。日記というより日誌という方が適切かもしれない。

それゆえに大戦期における彼の日記を紐解くための手助けが必要であった。そのために適切と思われたのはモーリス・パレオローク（Paléologue, Maurice）であった。彼はフランスの外交官であり、1914年から1917年にかけて駐露大使を勤めた。第一次世界大戦にあたり、彼は、ロシアと協調して独逸に対する戦争の勝利のために尽力した。そのために彼はロマノフ家の一族とも親密な関係を築くことに成功をしている。皮肉なことであるが、2月革命のためロマノフ王朝が倒れ臨時政府が成立すると、この関係が彼にとって重荷になった。彼が1917年5月に、駐ロシア大使を解任された理由の一つは、彼がロマノフ家と近すぎたからであった。なお、パレオロークは文筆の才能もあり、歴史に関する多くの著作を残している。この大戦期についても、日記スタイルの回想録を著している²⁾。

具体的に見てみよう。1916年12月19日のニコライ日記³⁾を引用する。

-
- 1) 拙稿「アレクサンドラ・フョードロヴナの日記 1917-1918年」、大阪学院大学『国際学論集』第26巻1・2号、2015年12月。拙稿「日露戦争と第一次ロシア革命-ニコライ 2 世の日記から-」、大阪学院大学『国際学論集』第16巻1号、2005年6月。
 - 2) Maurice Paléologue, *La Russie des tsars pendant la Grande Guerre 19 Août 1916-17 Mai 1917*, Paris, 1921.
 - 3) ニコライ日記のテキストは次に拠った。Дневник императора Николая II (1894-1918), Т.2, Ч.2., отв. ред. С.В. Мироненко, М., 2013. 日記中の [] の中は筆者が付加したものである。

「よく眠った。寒さは厳しい。客車ではずっと書見。5時にツァールスコエ・セローに着いた。いとしいアリックス [アレクサンドラ皇后] が娘と共に出迎え、一緒に帰宅。正餐後プロトポポフ [内相] を引見。」

きわめて簡素である。注釈なしには理解できない。ロシア軍総司令官であった皇帝はこの前日、総司令部のあるモギリョフを出発して、自ら居住しているアレクサンドル宮殿があるツァールスコエ・セローに帰還している最中である。帰還の理由は日記に明示されていない。しかしその2日前に、ペトログラードにおいてラスプーチン (Распутин, Григорий Ефимович) が暗殺されたことが関係していると思われる。プロトポポフ (Протопопов, Александр Дмитриевич) 内相を引見しているのも彼の暗殺に関する件であることが推測される。

同じ日のパレオログの日記を見よう。彼の日記は西暦 (グレゴリオ暦) でつけられている。他方ニコライの日記は露暦 (ユリウス暦) でつけられている⁴⁾ ので、パレオログ日記は、日付が13日進んでいる。すなわち1917年1月1日となる。

「ロシアの星の並びだけから判断しなければならないとすれば、新年は悪い星のもとに始まっている。あらゆるところで私は不安と落胆を見る。誰も戦争にもはや関心はなく、誰ももはや勝利を信じていない。大衆はもっとも不吉な出来事を予期し、それを甘受している。」

同じ日に彼はボクロフスキー (Покровский, Николай Николаевич) 外相と、戦争目的に関する米国の通牒に対する返答草案を論じたこと。とりわけポーランド復興についての案が、東部戦線におけるドイツの攻勢のもとでは絵に描いた餅にすぎないこと。それに落胆するボクロフスキーを、パレオログは、最終的勝利は「忍耐と精力」に依存していると慰めた

4) もっともニコライ日記は、1918年2月1/14日から3月18/31日まで、露暦と西暦が併記されている (後者が西暦)。2月1日の項目には「2月1日から暦を変更し、外国のものと同じにするという郵便で受領した指令が知られた。すなわち本日はもう2月14日である。誤解と混乱には終わりが無い！」と記されている。この日からボリシェビキ政権が西暦を使用したこと、それに対するニコライの困惑が認められる。並列が3月18日で終わっているのは、外部と孤立した幽閉生活において、新しい暦に慣れることができなかったためと思われる。

が、ボクロフスキーはため息をついて「しかし当地で起きていることを見てください。」と述べたことが記される。「当地で起きていること」については、それに続く記述が暗示している。

「皇后の命令により、皇帝陛下の侍従将官マクシモヴィチ将軍が、昨日、ドミトリー大公を逮捕した。彼は、ネフスキー通りの自らの邸宅で警察の監視下のもとで拘束されている。」

ドミトリー（Дмитрий Павлович Романов）大公が逮捕されたのは、言うまでもなく、彼がラスプーチンを暗殺したからである。パレオログ日記のこの2日前、すなわち暗殺当日に、優れた情報提供者により、午前中にユスポフ公爵邸でラスプーチンが暗殺されたことが午後7時に知らされたと記されている。ネヴァ川に遺棄された死体が発見されたのは、それから2日後である。ここにこの時期のロシアにおける問題が凝縮されている。人々が倦みはじめるほど長引く大戦のもと皇帝と皇后の寵愛を背景に跋扈する怪しい人物がついに殺害されたという図である。

既述のように拙稿の範囲においては、パレオログはすぐにフランスへ帰還することになるのであるが道案内としてとりあえず彼を頼ることとする。なお、行論の都合上、拙稿においては、これ以降基本的に露暦を用い、必要に応じてその後に西暦を表示することとする。

ラスプーチン暗殺

パレオログ回想録を見ると、すでに1916年にはラスプーチンに対するロシア人の批判は公然と語られるレベルに達していて、皇族に対する批判がかかわらなければドゥーマにおいても行われていた。暗殺に先立つ11月19日/12月2日において、ドゥーマ議員プリシュケヴィチ（Пуришкевич, Владимир Митрофанович）の扇動的な演説が記録されている。

「最も卑劣な人物を最高の官位に上げるには、ラスプーチンの推薦が必要なだけである。今日、ラスプーチンは、かつての偽ドミトリーよりも危険である。大臣閣下、立ち上がられたし。あなた方が真の愛国者ならば、司令部に行きなさい。皇帝の足元にひれ伏し、皇帝陛下に以下のことを申

し上げる勇気を持たれたし。民衆の抑圧のうめきが聞かれることをこれ以上長引かすことはできない。革命の恐れがある。一人の蒙昧な農民がロシアをもはや治めることはできないであろうと。」

このプリシュケヴィチは、のちにラスプーチン暗殺の主犯の一人となった。ここでラスプーチンが比肩されている偽ドミトリーとは、イワン雷帝末子ドミトリーの僭称者である。不満をもつ者に支持され、ロシアを混乱に陥れた。さらに、「最も卑劣な人物」とここで批判されているのは、プロトポポフ内相と思われる。彼は、ドゥーマ副議長であり、1916年夏にはドゥーマ代表として英仏を訪問。帰国後は、皇帝や皇后に謁見し好印象を与えた。ラスプーチンの口利き、皇后の推挙により同年9月に内相に就任していた⁵⁾。ただし、11月に首相に任命されたトレポフ (Трепов, Александр Фёдорович) は、プロトポポフ内相の解任を皇帝に要求していた。内相の背後に不人気なラスプーチンの影がちらつくこと、梅毒を原因とした精神疾患兆候のためである。さらに、ドゥーマを見捨てて個人的栄達のために大臣になったことが許し難いと思われたのも原因であろう。11月14日、トレポフはニコライ2世とこの件についてモギリョフにある総司令部において1時間15分にわたり話をしている。もっとも、総司令部に駆け付けたアレクサンドラ皇后の巻き返しにあって、トレポフはプロトポポフの更迭を実現できなかった。その2日後11月16/29日には、パレオローグは、次のような情報を記した。「トレポフ首相は、日ごとにますます明白になる精神疾患の兆候をあらわにするプロトポポフとともに統治することができないと認めた。皇帝陛下は一瞬たじろがれて、きつい調子で返答された。『アレクサンドル・フョードロヴィチ [トレポフ首相]、私が適切と考える同僚とともに義務を果たすことを命じます』。トレポフは怒りを抑えながら退出した。」

プロトポポフは皇后に週に2、3回謁見を求め、跪き「陛下、あなたの

5) ニコライは、経歴から考えてプロトポポフを通商産業大臣にふさわしいと考えていた。皇后は彼を内相に推挙しようとしたが、ニコライは「私たちの友人 [ラスプーチン] の人物評は時々奇妙だ」と反論している。しかし最終的には皇后に押し切られた。Joseph T. Fuhrmann, *Rasputin : the untold story*, Hoboken, 2013. p.180.

背後にイエスが窺えます」(12月8/21日)という歯の浮くような言葉で褒めちぎったとの情報が、パレオログの日記に書き込まれている。また、ヘッセン出身の皇后のロシアに対するコンプレックスをもうまく利用して、取り入っている。パレオログ日記12月28日/1月10日の記述であるが、その日のひと月ほど前、キリル大公夫人であるヴィクトリア・フョードロヴナ（Виктория Фёдоровна）が、皇后の謁見を受けた。皇后は次のように述べた。「…実際のところ、私は完全に間違っていました。ほんの最近まで、私は、ロシアが私を憎んでいると考えていました。今や私が知ったのは、私を憎んでいるのはベトログラードの社会だけであるということです。しかし、ロシアの全体性、すなわち本当のロシア、貧しくて、謙虚なロシアの農民は私とともにいるということに私は大きな慰めを見出しています。帝国のあらゆる地域から毎日私が受領する電報や書簡をあなたに示せば、あなたご自身も理解されるでしょう。」皇后を礼賛する電報や書簡を渡していたのは、内務大臣プロトポポフであると推測される。

しかし都市民衆の間ではもっと激烈な話が語られたようだ。12月10/23日のパレオログの日記項目に次のような話が書かれている。「モスクワからやって来たある友人が、昨日私のところを訪問、次のように述べた。かの地の民衆は皇后陛下に怒っている。客間、店やカフェでは、あの『ドイツ女』がロシアを滅ぼそうとしている、狂人として始末されなければならないと公然と語られている。皇帝陛下に対しては、陛下はパーヴェル 1 世の運命を熟考されるがよかろうと見解を述べるのが憚られない。」

あの「ドイツ女」とは皇后に対する侮蔑的な言葉である。第一次世界大戦時における反独感情を背景としている。確かに皇后の出身はドイツだが、幼くして母を失い、祖母であるイギリスのヴィクトリア女王のもとで育てられ、イギリス流の教育を受けている。ニコライに関して語られているパーヴェル 1 世は、クーデタにより暗殺された皇帝。暗にクーデタと暗殺に気をつけろと言っているのであろう。

さて、ニコライ 2 世日記にラスプーチン暗殺に関する記述が初めて見られるのは、彼のツァールスコエ・セロー到着から 3 日後である。

「12月21日 9時に全家族で写真館の傍の右の広場に行った。そこで悲

しい光景のもとたずんだ。忘れられないグリゴリーの死体の入った棺があった。彼は12月17日の夜にΦ.ユスポフの館で悪漢に殺害された。死体はすでに墓に降ろされていた。アレクサンドル・ヴァシリエフ神父は祈祷を行い、そのあとで私たちは帰宅した。…」

25日には、アレクサンドラ皇后の親友でラスプーチンとの連絡役となっていたアンナ・ヴィルヴォア（Вырубова, Анна Александровна）のところで、皇帝はラスプーチンの遺族にも面会している。世評の悪さにもかかわらず、皇帝がラスプーチンを厚遇していたことがわかる。ラスプーチンは、皇帝にとっては、人事への口出しや乱痴気騒ぎにより閉口させられることはあるが、多くの場合はよき話し相手であり、彼の日記には名前が頻出する。その上において、息子アレクセイの血友病が悪化する場合、病状を鎮静化させることができる人物と信じられていたのであった。

2 月革命

皇帝の日記には日常が淡々と流れていく様子しか見て取れない。しかしパレオログの日記には、暗い予言や次々と有力者が状況に絶望して辞意を表明する記述がみられる。

12月22日/1月4日、パレオログはペトログラードのモホヴァヤ通りに前首相ココフツォフ（Коковцов, Владимир Николаевич）を訪問している。前首相は前途を悲観し、宮廷クーデタまたは革命を予言した。「私はあなたに秘密を告げよう。トレボフが今朝私のところに来て、もはや責任を負うことを望まず、皇帝陛下に対して首相のポストの辞任を申し出たと述べた。私が不安に感じる十分な理由があることが理解されたでしょう。」

そのトレボフ首相は12月28日に辞職が認められた。後任は従順な老官僚であるゴリツィン（Голицын, Николай Дмитриевич）。「今までのところ、彼のキャリアは純粋に行政的なものであった…そして目立たない。彼は真面目で誠実ではあるが、意志が弱くそして楽天的であると言われている。／連合国の主張にとっては、トレボフという最強の後ろ盾が失われ

た。この無遠慮で忠実な従僕とともに、皇帝もまた最後の柱と最後の安全装置をなくしつつあることを私は危ぶんでいる」（12月28日 / 1月10日）と、パレオログは記す。皇帝の日記には12月28日の項目の中に「ゴリツイン公爵、新しい首相」とあるのみである。

さらに外相も辞意を申し出る。パレオログの日記には次のように記される。「昨日、ボクロフスキー〔外相〕が、皇帝と長時間謁見した。ボクロフスキーは、現状においては外交政策に対する責任を負うことができないと強い表現で述べた。／皇帝は非常に穏やかに彼の言を聞かれ、それから彼に職にとどまるよう命じられた。『状況はそれほど悲劇的ではなく、すべてはよくなるであろう』と述べられた。」（1月4 / 17日）。皇帝の日記には1月3日の項目の中に「ボクロフスキーと引見」とあるだけに過ぎない。

ロシアの同盟国の外交官もニコライ 2 世に対して相当ぶしつけな口調で問題を指摘している。ニコライは、イギリス大使ブキャナン（Buchanan, George）を12月30日に引見していることが、その日の皇帝日記に「11時にブキャナン…を引見」と記されていることで確認できる。その内容についてはパレオログが詳述する。「ブキャナンは、ロシア社会のあらゆる階級で増している混乱と不安により、ロシアや連合国に対して与えられる巨大な害を指摘した。彼は、皇后陛下の取り巻きの中でドイツのエージェントが行っている陰謀を非難することもひるまなかった。その陰謀は臣民の皇后に対する愛情を損なっている。彼はプロトポポフなどの悪影響も言及した。最後に、ロシアの専制に対する忠誠を誓いながらも、皇帝陛下に対して、今や開かれている二つの道のどちらかの選択をひるまないことを求めた。二つの道は、一つは勝利に至り、他方とはとんでもない災厄に至るのである。／皇帝陛下の態度は固く冷淡であった。彼は沈黙を破り、二つの異議を提示するだけであった。一つは『大使よ、私が民衆の信頼に値するべきとあなたは述べた。むしろ民衆が私の信頼に値するべきではないのか。』第二は『あなたは私の大臣選任にあたり助言を受けていると考えているようだ。まったく間違っている。私は、助言なしに自分で選任した』。陛下は次の簡素な言葉で謁見を締めくくった。『さようなら、大

使』』。(12月31日 / 1月13日)

閣僚たちの絶望を裏付けるような、専制に対する批判を全く受け付けない頑なな皇帝の態度が見て取れよう。おそらくイギリス大使の主張するところは、プロトポポフ内相などの皇后の取り巻きを排除したうえで、ドゥーマの支持のもとに内閣を作り、挙国一致で戦争に臨むことである。ブキャナンの「ドイツのエージェントが行っている陰謀」については何を指すのか明瞭ではないが、ラスプーチンがかつてのようにみなされた、生活苦に根差した厭戦的な対独単独講和運動のことであろう。そもそも彼は民衆の厭戦の感覚を代弁し、ドイツやオーストリアとの戦争に反対する素朴な平和論を唱えていたのだ。

1917年1月、連合国の政治指導者と軍人がペトログラードに集まり、現状を分析し、戦争協力の実をあげるために会議が開かれることになっていた。その事実は皇帝の日記からもうかがわれる。

「1月18日 11時、集合した会議のメンバーと面会—英伊仏から全部で37人。およそ1時間彼らと話をした。」

会議は実り多い結果をもたらすことなく、2月上旬に終わる。会議終了に際してのパレオログのフランス大統領と首相に宛てたロシアの情勢評価が参考になる。「…ロシアにおいて革命的危機は迫っている。それはほとんど5週間前に起きようとして、単に延期されているにすぎない。日ごとにロシア人は、戦争に対してますます無関心となり、無秩序の精神がすべての階級や軍隊にさえ広まっている。昨年10月の終わりごろ、ペトログラードで非常に意義のある事件が起きた。私はそれをブリアン氏に報告した。ヴィボルグ地区でストが起き、警察が労働者により手荒く取り扱われたので、近隣の兵営にいた2個連隊が呼ばれた。これらの2個連隊は、警察に発砲した。コサック部隊が直ちに呼ばれ、反乱者を正気にさせた。それゆえに、反乱の場合、当局者は軍隊に依拠することができないのである。私の結論は、時期は私たちに有利に働いていず、私たちはそれゆえに私たちの同盟国の離脱を計算に入れて、あらゆる考慮をしなければならないということである。」(2月8/21日)

5週間ほどの前の革命とは大公による宮廷クーデタの失敗のことを意味

すると思われる。しかし残念ながらこれはほかの史料で裏付けが取れない⁶⁾。彼の発言で、注目すべきは、軍隊の一部が秩序を維持する側から、反抗する側に回る場合のあることがすでに示されていることである。そのうえで国内混乱を原因とするロシアの戦線脱離が計算に入れられなければならないのである。

このような中、ドゥーマが2月13日に再開されることとなった。パレオログの日記にはその知らせが引き起こした動揺が次のように記される。「国家ドゥーマが次の火曜日、2月13/27日に再開されることになった。そしてこの事実が工業地区において興奮を引き起こしている。この動揺は十分なものであり、首都の軍事総督ハリコフ将軍をして、公的集会を禁じ、公衆に対して『当局に対するあらゆる反抗はただちに武力により鎮圧される』ことを知らせる布告を出さしめた。」（2月10/23日）

同じころ皇帝の日記には相変わらず簡潔な記述が行われている。

「2月10日金曜日 …2時にサンドロが来た。そして私立ち合いのもと、寝室においてアリックスと長い談話。…お茶の時にロジャンコと面会。ミーシャが喫茶。その後シチェグロヴィトフと面会。夜は11時まで執務。」

サンドロ、すなわちアレクサンドル・ミハイロヴィチ（Александр Михайлович）大公が、皇帝や皇后と話し合ったことが見て取れる。内容

6) パレオログの日記、12月23日/1月5日の項目には次のようにある。「…夜にロマノフ一族の間で大きな興奮と動揺があるということを聞いた。その中にマリア・パーヴロヴナ大公夫人の3人の息子、キリル、ボリス、アンドレイを含む幾人かの大公たちが、皇帝を挿げ替えることで専制を救うことを話していた。忠誠がすでに揺らいでいる近衛4個連隊の助けを得て、ツァールスコエ・セローに夜間行軍を行うことになっていた。王侯たちが捕えられ、皇帝陛下には退位の必要が示され、皇后陛下は修道院に閉じ込められる。それから皇太子アレクセイが、ニコライ大公のもと帝位につくことが宣言されるであろう。／この計画の発起人たちは、ドミトリー大公が、ラスプーチン殺害への関わりのために、陰謀を指導し軍隊を説得する運命にあると考えていた。彼のいとこである、キリルとアンドレイ・ウラジミロヴィチは、ネフスキー通りにある彼の館を訪ねて、『国家救済の仕事を果敢にやり抜く』ことを彼に懇願した。長い間精神的に葛藤してから、ドミトリー・パーヴロヴィチは、『皇帝陛下に手をかける』ことを拒否した。彼の最後の言葉は『私は忠誠の誓いを破れない』であった。」

は日記からはうかがえない。大公によれば、この談話は、「民衆の要望や願望」に向き合うための改革に関するもの。より具体的には次のように述べられる。「政府は信頼を得ていず、民衆の要求や願望に向き合えない人で構成され、何もすることができない。悪い雰囲気が強まり、不満が増えて、警察だけで統治することも頼ることもできない」。要するに、先ほどのイギリス大使の議論と同じものと考えられる。これに対してアリックス、すなわちアレクサンドラ皇后は、「余計なことに口出しせずに、忍耐をして、現在の政府に対して時間を与える必要がある」と言うのみである。大公がアリックスに話をしているのは、この時期における内政に対する彼女の影響力があると認知されているからである。この談話の際のニコライは問題に無関心であると描かれているに過ぎない。「ニッキー [ニコライ2世] は会話に対して全く消極的な参加、時々自己の異議を提示するが、確信がない。他面から言えば、彼女がずっと喋り、激高し早口になり、私は彼女の異議を一つも止められず、私の異議も出せなかった。ニッキーは第三者であった。その面前で彼の行為が議論されていたのであるが、彼は自己の袖なしカフタンにかかりきりで、その縁を直していたが、聞いていた⁷⁾。」

その後に出てくるロジャンコ (Родзянко Михаил Владимирович) は、「10月党」の創設者であり、この時ドゥーマ議長である。彼はドゥーマ開会を前にして、ニコライと公式会見した。ロジャンコの回想によれば、ニコライは彼の報告に極めて冷淡に反応をしたという。

「皇帝の態度は無関心であるだけでなく、きつくさえあった。軍や都市の悪い食料事情、機関銃の警察への譲渡、一般的な政治的事情に関わる報告を読む際に、皇帝は怒り、最後に私をさえぎった。『急ぐことはできないのですか。ミハイル・アレクサンドロヴィチが私を待っています。』彼はきつく指摘した。…国内における脅威的な雰囲気と革命の可能性について言及した際、皇帝はさえぎった。『私の情報は完全に逆です。またドゥーマの態度に関して、もしドゥーマが、前回と同様に、このように厳

7) Дневник императора Николая II (1894-1918), Т.2, Ч.2., стр.349-350.

しい発言をあえておこなうのであれば、ドゥーマは解散されるでしょう。』⁸⁾」

皇帝の情勢認識が極めて現実離れしていて、それゆえにロジャンコの絶望が伝わってくる。ただ、皇帝が急いでいると言ったのは嘘をついたわけではない。皇帝の日記記述には、ロジャンコの後に「ミーシャが喫茶」という簡単な記述がある。ミーシャ、すなわちミハイル・アレクサンドロヴィチ（Михаил Александрович）大公は、ニコライ 2 世の実弟にあたり、この数週間後に譲位する相手となるはずであった。また単に喫茶をしただけではない。軍では、皇帝がツァールスコエ・セローに居住し、それゆえに長期にわたり司令部を不在にしていることに関して不満が起きていることを大公は伝えたのである⁹⁾。これを契機としてニコライは出発を早めることを決意した。

22日、ニコライは、いったんドゥーマの開会を延期し、そして3月1日までに首都に帰還する予定でツァールスコエ・セローを発つ。翌日モギリョフに着いた。皇帝日記によれば

「2月23日木曜日 3時にモギリョフに着いた。アレクセーエフ將軍と参謀により迎えられた。彼と一時間過ごした。アレクセイのいない家は空虚に思えた。」

ニコライは、1916年からアレクセイを、白血病が悪化したときの処置が不十分になるかもしれないというリスクをとってまで、総司令部に連れ出した。将来の帝位継承を見込んで、アレクセイが皇太子であることを可視化しようとしたのだろう。しかしこの時はアレクセイの風疹のために連れ出すことができず、空虚さを感じている。26日、ニコライはアリックスに対して書簡を書いている。ニコライは、病人の看病（アレクセイ以外の子供たちも麻疹に倒れている）をするアリックスをねぎらう。そして「私は期待しているのだが、ハバロフ〔ペトログラード警備司令官〕はすぐに通りの騷擾を始末することができるであろう。プロトポポフ〔内相〕は、彼に対して明確で断固とした指示を与えるべきである。この年老いたゴリ

8) Там же, стр.350-1.

9) Там же, стр.351.

ツィン「首相」だけは、度を失わないであろう！¹⁰⁾」この時点においても、ニコライは状況に対する楽観的な見通しを皇后宛の書簡で述べる。

他方、ペトログラードでは気象条件にも恵まれず、状況がますます悪化してきた。パレオログの日記を見よう。「ペトログラードはパンと薪が不足していて、民衆は不足に苦しんでいる。この件について私はポクロフスキーと話をしたが、彼は不安を隠さなかった。しかし何をなすべきなのであろうか？輸送の危機は、実際のところひどくなっている。全ロシアを襲った極めつけの厳寒（-43度）により、ボイラーの管が損なわれたために、1,200台以上の機関車が動けなくなった。他方予備の管は、ストのために不足している。それ以外に、最近の降雪は例外的にひどく、舗道を除雪するための労力が村落において不足している。結果として、5万7千両の客車が動けないのである。」（2月21日/3月6日）さらに2月23日/3月8日には、国際婦人デーのデモが予定されていた。

事態の悪化に対して秩序を維持するために強硬策がとられ、それが反発を生む。2月26日には、ハバロフ将軍は次のような掲示を出した。「すべての集会または会合は禁止」。軍に対して武器を使用して秩序を維持するために新しい権限を与えた。2月27日には、一部の連隊の反乱が決定的になった。パレオログはこの日の午前8時半、アレクサンドル橋から音が聞こえているのに気が付くが、軍隊と赤旗をなびかせる群衆が交歓しているためであった。午前10時過ぎ、彼は大使館付武官とともに現場に行く。リティヌィ通りでは混乱が起き、兵士が市民のバリケードづくりの手助けをしている。裁判所からは火が上がり、兵器庫の扉はあけられ、機関銃の音が響き、革命派の人物が「ネフスキー通りの陣地は兵士が占めている」と叫ぶ。軍の忠誠心が揺らいだことが明らかである。

さすがにニコライ2世の日記も2月27日に音調が変わる。

「2月27日月曜日 ペトログラードでは数日前から騒擾が始まった。遺憾なことに、その中に軍隊も参加し始めた。断片的な良くない知らせをこのような離れたところで受け取ることは極めて嫌な感情である！」

10) Там же, стр.353-4.

ようやくプロトポポフ内相から首都の騒乱の制御できない旨、治安を維持する側が治安を乱す側に加わったことが皇帝に伝えられたのである。2月28日、イヴァノフ（Иванов, Николай Иудович）将軍に対して秩序回復のために例外的権限が与えられた。問題はモギリョフにいる将軍が首都にたどり着けるかどうかわからなかったことである。ニコライも首都へ帰還を急いだ。同日午前5時、モギリョフを出発する。しかし革命の混乱の中、列車はツァールスコエ・セローに行けず、3月1日、プスコフに止まらざるを得なかった。

ペトログラードでは、大臣会議が継続的に開かれていた。他方、ドゥーマ執行委員会と労働者と兵士の代表者ソヴィエトが事態収拾に乗り出す。パレオログの日記によれば、「ドゥーマ執行委員会と労働者と兵士の代表者ソヴィエトは、次の諸点で合意に達した。(1)皇帝退位、(2)皇太子即位、(3)ミハイル大公摂政、(4)責任内閣組織、(5)普通選挙による制憲議会選挙、(6)すべての民族の法の前の平等。…しかしこの日の関心の総体は、小さな町プスコフに集中されていた。…ツァールスコエ・セローに到着できなかった皇帝の列車が、昨夜8時にそこに到着した。皇帝は、ドゥーマ議長ロジャンコに対して、退位する意向を報告するようルズスキー将軍に指示した。…」(3月2/15日)

皇帝の日記によれば

「3月2日木曜日 午前中〔北西方面と北方方面軍総司令官〕ルズスキーが来て、ロジャンコとの国家機構についての長い談話を讀んだ。彼の言葉によれば、ペトログラードにおける情勢はひどいものであり、今はドゥーマの政府は何かをするためには無力であるという。なぜならば労働委員会の形で社会民主党がそれと戦っているからである。私の退位が必要である。ルズスキーはこの談話を総司令部へ、他方アレクセーエフはすべての司令官に伝えた。2時半までにすべてからの返事が来た。その要点は、ロシアを救うため、前線の軍隊を静謐に維持するために、この方策を決断することが必要ということだ。私は同意した。大本営から宣言原案が送られた。夜にペトログラードからグチコフとシュリギンがやって来た。彼らと私は交渉をして、彼らに対して調印して修正した宣言を与えた。夜の1時

に経験したことに対して重苦しい感情をもちながらプスコフから出発した。周囲の裏切り、臆病、欺瞞！」

この期間の日記で最も詳細な記述である。アレクセーエフ（Алексеев, Михаил Васильевич）参謀長が、事態収拾のためにニコライの退位を促すため、軍司令官の意見を自ら尋ねたのであった。司令官たちはそれに応じて肯定的な返事をおこなった。専制の支柱であった軍に見放されたニコライ2世は追い詰められた。「周囲の裏切り、臆病、欺瞞！」と珍しく感情をあらわにしながらも、譲位せざるを得なかった状況が描かれている。ただし、皆の予想に反したことに、ニコライ2世が皇太子アレクセイにではなく、弟のミハイル大公に譲位をする意思を示した。法的にはそのような権限はニコライにはなかったが、アレクセイの病気を心配し、彼と離れ離れになることを懸念したのである。

ニコライの列車はツァールスコエ・セローに向かわず、モギリョフの総司令部に向かった。

「3月3日金曜日 アレクセーエフが、ロジャンコからの最新のニュースをもってやって来た。ミーシャが退位したようである。彼の宣言は一般平等直接無記名選挙で終わっている。6カ月後に制憲会議を選ぶためのものである。誰が彼をしてこのような醜悪なものに署名するよう助言したのかは、神のみが知っておられる！ペトログラードにおいて騒乱は止まった一さらに継続しさえすればよいのだが」

ミハイル大公も退位し、ここに帝政は終わりを告げた¹¹⁾。

11) ところで、ニコライ2世は皇太子に帝位を譲るべきではなかったかとパレオログは考えていた。総司令部における外交部をつかさどっているニコライ・アレクサンドロヴィチ・バシリイ（Базилий, Николай Александрович）と、3月5/18日に彼は話をしている。「私たちは全くびっくりしてお互い見つめ合った。同じ考えが浮かんできたのであった。皇太子への直接的譲位が、進行中の革命を止める、または少なくとも革命を立憲改革の範囲内にとどめるための唯一の手段であったということだ。第一に、若いアレクセイ・ニコラエヴィチは、法律が味方であろう。彼は、自分に対する臣民や軍隊の同情的な感情により利益を得るであろう。最後に、そしてこれが重要な点なのであるが、帝位は一瞬たりとも空位ではなかったであろう。もし皇太子が帝位につくと宣言されれば、誰も彼を退位させる権限を持たなかったであろう。ミハイル大公に対して起きたことは、この少年の場合においては、あり

さてパレオローグの日記 3 月 6/19 日には、「ニコライ・ロマノフ」から臨時政府に対する要求が出され、認められた旨の記述がある。すなわち(1)モギリョフからツァールスコエ・セローへの自由通行。(2)子供が麻疹から回復するまで、アレクサンドル宮殿で居住する許可、(3)ツァールスコエ・セローからムルマンスク湾のロマノフ港までの自由通行。この情報源は臨時政府のミリューコフ（Милюков, Павел Николаевич）外相であり、ニコライの亡命の意思と受け取っている。しかし 3 月 8/21 日の日記には、前皇帝夫妻が穏健派と結託し専制復活を目指しているとの荒唐無稽な噂とともに彼らが拘束されることになったと書かれている。この事態を受けミリューコフはイギリスとの接触を急いだ。3 月 10/23 日の日記には次のように書かれている。「今朝、ブキャナンは次のように知らせた。ジョージ国王は、内閣の助言と承認を得て、皇帝と皇后に対してイギリス領土における歓待を提供された。しかし両陛下の安全を保障することを拒否され、両陛下は戦争の終わりまでイギリスにとどまられるという希望を述べるにとどめられた。ミリューコフは、この通知にひどく感動した。しかし悲しげに付言した。『しかし来るのが遅すぎたと思われます。』」イギリスの返事はすぐに伝えられたが、すでにソヴィエトが態度を硬化させて、前皇族の海外への亡命に反対したのだ¹²⁾。

えなかったであろう。摂政の任命についての議論は起きたであろう。しかしそれだけである。ロシアは元首を持つことになったであろう…しかし私たちは今やどこにいるのであろうか」

皇太子への譲位にパレオローグが指摘するだけの効果があったのかは分からない。皇太子の白血病も考慮しなければならない。しかし、皇太子に対する同情あることを前提とすれば、ミハイル大公に対する譲位は法律的に相当無理があり、干渉される可能性が高かったという指摘は当たっていると考ええる。

- 12) ニコライ日記 3 月 23 日には「自分のものや本を整理、もしイギリスに出発せざるを得ないのであれば、持っていきたいすべてをまとめ始めた。」という記述がある。これは、時期的にイギリス亡命がソヴィエトの意向により困難になった後のことであり、この記述の裏に何らかの具体的な試みがあったわけではないと思われる。臨時政府はこの後も断続的に前皇帝とその家族のイギリス亡命の可能性を探り続けた。6 月中旬イギリスの方から前皇帝の亡命受け入れ撤回が行われた。専制君主をイギリスに受け入れるリスクが高く評価されたためと思われる。

ツァールスコエ・セロー

ニコライは8日までモギリョフに滞在してから、ツァールスコエ・セローに送られた。

「3月9日木曜日 素早くそして首尾よくツァールスコエ・セローに到着した。11時に。しかし、神よ、何たる違いがあることか。通り、宮廷の回り、礼拝堂の公園の内部、また玄関の内部に少尉補のようなものがある！上に行き、そこでいとしいアリックスと愛らしい子どもたちを見た！彼女は快活で元気そうに見えたが、子どもたちは皆暗い部屋で横になっていた。しかし皆の気分は良かった。マリア以外は。彼女においては麻疹が始まったばかりであった。」

「3月10日金曜日 よく寝た。私たちがその中にいる条件にもかかわらず、私たちが皆一緒であるという考えは喜ばしく慰めである。午前中ベンケンドルフを引見、その後書類を見て、整理して焼いた。」

ここからツァールスコエ・セローにおける軟禁が始まる。前皇帝、その家族、取り巻きたちはアレクサンドル宮殿の中に閉じ込められる。だが警備している将校や兵士は、建物の中には自由に立ち入ることができない。前皇帝たちは、宮殿の庭園を散歩したり、作業をすることは、監視付きで時間制限を付されて可能となる。外部との通信は検閲のもとで可能であり、新聞を取り寄せることも自由にできた。このような制約された環境においても、ニコライは家族と一緒にいることがよいと考えている。彼の家族に対する思いが見て取れる。

体制の変化とともに民衆にも変化が現れる。アレクサンドル宮殿の格子越しに野次馬が集まり、皇帝一家を見物するという現象が、皇帝の日記に記された。

「4月2日神聖なキリストの復活 昼間、橋のところで作業をした。しかしすぐに格子越しに多数のやじ馬が集まった。立ち去り、そして残りの時間を庭においてつまらなく過ごさざるを得なかった。」

「4月6日木曜日 アレクセイと同時に散歩、他方日中は橋の下の水門のところとその後小川のところで氷を割った。この際理由は分からないが

至る所に将校以外に 6 人の狙撃兵が随伴していた！」

革命に伴い兵士の前皇帝に対する態度も変化する。

「4 月 7 日金曜日 兵士の表情や彼らのなれなれしい挙措がすべてに対して嫌な印象を与えた。」

一部の兵士は前皇太子にも嫌がらせをする。アレクセイが持っているライフルのミニチュアに難癖をつけた。

「6 月 3 日土曜日 この時期、アレクセイのライフルに関して災難が起きた。彼はそれを使って島で遊んでいた。庭を散歩していた狙撃兵がそれを見て、将校に対してそれを取り上げることを求め、それは衛兵の施設に運ばれた。その後判明したところによれば、なぜかそれは市役所に送られた！」

それだけではない、兵士の間には緊張もある。

「6 月 10 日土曜日 夜の 11 時頃庭で銃声がした。15 分後警備司令官が入ることを求めて、歩哨が銃撃したと説明した。なぜならば歩哨においては、子供の寝室の窓から赤いランプにより信号が送られていると思えたからであった。電燈の配置を見て、窓際に座ったアナスタシアの頭の動きを見た、長官と共に入って来た下士官の一人は、問題のありかを推測した。そして彼らは、お詫びをして去っていった。」

兵士において、前皇帝一家が逃亡のためにランプの明滅により外部と通信しているのではないかという疑心暗鬼のなせる業と思われる。それにも関わらず、時とともに前皇帝と警備している兵士との間にそれなりの関係が作られていたことも伺える。

「6 月 26 日月曜日 私たちの良き宮廷司令官陸軍大佐コビリンスキーは、私に対して局外者がいるとき将校に対して手を差し出さないこと、狙撃兵と挨拶をしないことを求めた。これまで、狙撃兵たちが返事をしないケースが何度もあった。…温室外の枠から近いところで巨大なエゾ松を切った。狙撃兵自身は私たちの作業を手伝うことを望んだ。」

宮廷司令官の立場からすれば、第三者の目を気にして、警備側と被拘束者との関係を明確にしたいということである。

臨時政府のケレンスキー（Керенский, Александр Фёдорович）司法大

臣が突然、ツァールスコエ・セローを訪問している。

「3月21日火曜日 本日の昼、現在の司法大臣ケレンスキーが突然来た。すべての部屋を通り、私たちに会うことを望み、私と5分ほど話をし、新しい宮廷警備司令官[コロヴィチェンコ大佐]を紹介し、その後去った。彼は可哀そうなアーニャを逮捕し、彼女をリリ・デンと共に街に送ることを命じた。これは3時と4時の間に起きて、その間私は散歩していた。天候はひどく、私たちの態度に対応していた！」

ベンケンドルフ伯爵によれば、ケレンスキーの来訪目的は、ニコライが、大臣報告や大臣に対する命令にかかわる文書を保管しているかどうかという照会である。前大臣たちの非常時調査委員会の尋問のためとされる。当然、ベンケンドルフは、ニコライ自身の召喚にも備えて、文書を再検討することを勧めたという。アーニャとはアリックスの親友アンナ・ヴィルヴォアのことである。

なおこの日のことをパレオログも3月22日/4月4日の日記に記している。興味深いのはケレンスキーのニコライに対する態度の変化が伝わってきていることである。「ケレンスキーはニコライ2世の生まれつきの美点である愛想の良さに屈服し、何度か『陛下』とつぶやき口をつぐんだ。」とある。

「3月27日月曜日 礼拝式の後でケレンスキーが来て、食事のときに私たちが一緒になることを制限すること、子どもと別々にいることを求めた。このことは、高名な労働者と社会主義者代表ソヴィエトを静かにさせるために必要であるかのようであった！何らかの強制力を避けるために従わざるを得ない。」

このときのケレンスキーの要求は、ニコライとアリックスを離すことであった。アリックスの女官の証言によれば、アンナ・ヴィルヴォアのところからでた重要文書が原因であるという。アリックスの政治関与が問題にされ、前皇帝夫妻が何らかの口裏合わせをすることが恐れられたのであろう。

「4月12日水曜日 昼間ケレンスキーが来て、私をして氷の作業から注意をそらせた。初め彼はアリックスと話をし、後に私と話をした。」

ベンケンドルフ伯爵によれば、ケレンスキーと皇后との間の談話は次のとおりである。「大臣は丁重であり抑制的であった。彼は皇后陛下に対して、政治において彼女が演じた役割、彼女の大臣選任や国事に対する介入について尋ねた。皇后陛下は彼に対して次のように答えた。皇帝陛下と彼女は仲睦まじい家族であり、お互いに秘密はなく—すべてを共有していた。それゆえに、もし最近の苦しい経験の際に、政治が彼らの間で大きな場所を占めたとしても驚くべきことではない¹³⁾。」ケレンスキーの「尋問」はこれ以降行われなかった。

ところで、臨時政府は連合国の一国としていまだに第一次世界大戦を戦っている。前総司令官であるニコライは、外部から得られる情報を日記に記している。「4月事件」ののちに陸海軍相となったケレンスキーが、南西方面で攻勢を指揮したことが見える。

「6月19日月曜日 まさに正餐の前に、南西戦線において攻撃が始まったことに関する良い知らせが届いた。ゾロチョフスキー方面では、2週間の砲撃の後に、私たちの部隊は敵の陣地を突破し、およそ170人の将校、10,000人の兵士を捕虜にし、6門の砲と24丁の機関銃を捕獲した。主に対して感謝！神よ成功を与えたまえ！この喜ばしい知らせの後では、自ら全く別のことを感じた。」

作戦の幸先はよく、ニコライは素直に喜ばしいと記している。しかしその数週間後事態は悪化する。南西戦線における臨時政府軍兵士の士気が落ちて、敵前逃亡するものが続出した。もちろん独逸はこの事態を利用して反撃をおこなった。臨時政府は規律を再確立するために、一旦廃止された、逃亡者に対する死刑を再導入せざるを得ない事態となった。

「7月13日木曜日 最近、南西戦線に関して良くない知らせが届いている。私たちのガリチにおける攻撃後、多くの部隊は、卑劣な敗北主義的教えに完全に汚染されて、前進を拒否したばかりでなく、一部の地点は、敵の圧力がなかった時でさえ後方に退いたのだ。ドイツとオーストリアは、自分にとって好都合なこの状況を利用して、少数の勢力により、ガリチア

13) Дневник императора Николая II (1894-1918), Т.2, Ч.2., стр.381-2.

南部において突破をおこなった。このためにすべての南西戦線は東に後退を余儀なくされるかもしれない。／全く恥辱と失望！本日ついに臨時政府により以下のことが宣言された。すなわち、戦場において、国家的裏切りが立証された人物に対して死刑が導入されるということである。この方策をとることが手遅れでなければいいのだが。」

同じころペトログラードでは、反政府運動が起きている。

「7月5日水曜日 ペトログラードでは、最近、銃撃を伴う騒乱が起きた。昨日、クロンシュタットからそこに、多くの兵士と水兵が到着した。臨時政府に反対しに行くためである！まったくのごたごただ。この運動を掌握することができ、反目と流血を止めることができる人物はどこにいるのだろうか？すべての悪の種子は、ペトログラード自身にあり、全ロシアにはないのである。」

「7月6日木曜日 幸いなことに、ペトログラードにおける圧倒的多数の部隊は自己の義務に忠実なままであり、通りににおける秩序は再び確立された。」

記されているのは、7月3日から5日に起きた反政府活動、いわゆる「7月事件」。クロンシュタットの水兵、ペトログラード工場労働者などが起こした自然発生的運動とされる。臨時政府即時退陣、権力のソヴィエトへの移譲、早期講和をスローガンとしていた。この運動をボリシェビキが指導していたのかどうかについては諸説ある。臨時政府は反政府運動を抑え、秩序を維持することができた。「7月事件」の後、ケレンスキーが臨時政府首相となった。ニコライは、数回しか出会っていないこの人物をほめそやす。ケレンスキーの方もニコライを評価しているのであるから、お互い波長が合ったのであろう。

「7月8日土曜日 政府の編成においては、変化があった。リヴォフ侯爵が去り、大臣会議議長〔首相〕にはケレンスキーがなるであろう。それと共に陸相と海相にとどまり、さらに通商産業省の管掌も手に入れた。／この人物は現時点でこの地位にいて有益である。彼に権力が多ければ多いほどますます良いであろう。」

もちろん首都で騒擾が起きているのであるから、その近辺にあるツァー

ルスコエ・セローも安泰ではない。これに関してケレンスキーが自らやって来た。

「7月11日火曜日 自宅に戻ってから、ケレンスキーの到着を知った。談話の中で彼は私たちが南におそらく出発することについて言及した。ツァールスコエ・セローが、平穏でない首都に近いためである。」

「7月12日水曜日 私たち皆は差し迫った移動について考えて話をした。4か月の隠遁生活の後にここから出発することは奇妙と思われる。」

皇族についていた医師が、アレクサンドラの健康状態を考えて南への移動をすでに進言していた。さらに「7月事件」が起きたことにかんがみ、安全を考えて、前皇帝一家を別の場所に移送する予定となった。だが、具体的な行先や時期は告げられず、彼らはイライラした。さらにペトログラードにおける政変も重なった。7月24日にケレンスキー首班の第二次連立内閣が発足している。

「7月25日火曜日 新しい臨時政府が、ケレンスキーを筆頭として作られた。彼のもとで事態が良くなるのか見てみよう。第一の課題は、軍における規律強化、軍の士気の向上、またロシアの国内情勢に対して何らかの秩序をもたらすことである！」

ニコライは出発予定日の3日前にはじめて行き先を知った。

「7月28日金曜日 昼食後ベンケンドルフ伯爵から以下のことを知った。すなわち私たちはクリミアではなく、東方へ3または4日の旅程のところにある遠方の県の都市に送られるということである！しかしまさにいつなのかは、警備司令官でさえ知らないと言われている。他方私たちと言えば、リヴァディアにおける長期の滞在を大いにずっと期待していたのであった！」

彼らが期待したリヴァディア（クリミア）ではなかった。おそらくすでにニコライの母であるマリア・フョードロヴナ（Мария Фёдоровна）などがそこに住んでいたことが臨時政府に嫌われたのだと推測される。前皇帝の行き先が正確にはどこなのかは漠然としていた。

7月31日月曜日が、ツァールスコエ・セローからの出発予定日であった。しかし様々な事情で出発時間が次々に延期された。前皇帝の移動が極

秘とされていたために、準備がはかどっていなかったからである。ケレンスキーは自らやって来て、ニコライの弟のミハイル大公が現れると告げた。なおこれがこの兄弟の最後の面会となった。

「実際のところ、10時半頃いとしいミーシャは、ケレンスキーと衛兵の長官を連れて現れた。出会ったことは非常にうれしかった。しかし局外者がいるところで談話をすることは不都合であった。／私たちの出発についての秘密は大いに守られていたので、車や列車は出発指定時間後に申し込まれた。いらいらはものすごい！／アレクセイは眠りたかった。彼は横になったり、おきたりした。何度か間違った知らせがおこなわれ、外套を着て、バルコニーに出て、再び広間に戻った。全く夜が明けた。お茶を啜し、そしてついに5時にケレンスキーが現れ、行くことができると述べた。私たちの2台の車に乗り、アレクサンドロフスカヤ駅に向かった。…日の出は美しかった。そのもと、私たちはペトログレードへの道を進み、連絡支線で北部鉄道に入った。午前6時10分にツァールスコエ・セローを去った。」

トボリスク

8月1日午前5時、ニコライたちは、ツァールスコエ・セローのアレクサンドル宮殿を出発した。中東鉄道に乗り換え、2編成の列車で東進。チュメニに着いたのは、8月4日午後11時半。そこから船に乗り換え、トゥーラ川、トボル川をさかのぼり8月6日にトボリスクに着いた¹⁴⁾。前皇帝一家のトボリスク移送は、彼らを首都から離し、シベリアの静かな環境の中に置くことを目的としていた。前皇帝一家のためには、刑務所ではなく、知事邸が用意されていた。しかしそこでは準備不足が判明し、13日まで船に留め置かれた。もっとも、トボリスクでも、ツァールスコエ・セ

14) この際、トボル川を航行中、ラスプーチンの故郷を目にすることができた。ニコライに日記によれば次の通り。「8月6日日曜日 昨日正餐の前にグリゴリー〔ラスプーチン〕の故郷であるボクロフスキー村の付近を通り過ぎたことに言及するのを忘れた。」

ローと同様の拘束状況であった。しかし異なる点もあった。トボリスクでは居住地敷地内に教会がなかった。彼らの宗教的欲求をいかに満足させるのが問題となった。

「8月15日火曜日 私たちは通りに出されず、目下のところ教会に行くことができないので、11時に広間で聖体礼儀式がおこなわれた。」

トボリスクにおいても、ニコライは敷地内において体を動かすことに精を出す。鉄棒づくり、枯れた松の処理、菜園の準備。しかしながら、次のような感想が漏らされる。

「8月25日金曜日 小庭園での散歩がありえないほどつまらなくなった。当地においては監禁されているという感覚が、ツァールスコエ・セローにおけるよりもはるかに強力である。」

皇帝一家を監視するため、9月1日、臨時政府からの新しいコミサル・パンクラトフ（Панкратов, Василий Семенович）が到着した。

このコミサールの回想によれば、前皇帝は、なぜ教会に行く許可が出ないのか、逃亡をおそれているのかと尋ねた。パンクラトフは、許可はあるが当面は外出させられない。トボリスクの住民からの皇帝一家に対する悪意ある反応が恐れられているからであるという。もっともこの1週間後住居から近くにある教会に行くことが許可された¹⁵⁾。

「9月8日金曜日 初めてブラゴベシチェニア教会に行った。そこではすでに以前から私たちの聖職者が勤務していたのだ。しかし満足は、私たちのそこへの行列がおこなわれた、ばかみたいな状況のために損なわれた。誰もいない公園の小道に沿って狙撃兵が立っていた、他方教会には多数の群衆がいた！このことは私を大いにうんざりさせた。」

トボリスクにおいて、この時期、皇帝一家はこのように外出の自由はある程度の制限を受けていた。しかしまだ外部からの情報、例えば新聞を読むことができた。第一次世界大戦はまだ継続していて、皇帝は戦況を日記に記している。戦況は臨時政府に有利でない。

「8月24日金曜日 本日、リガが放棄され、私たちの部隊は北東方面へ

15) Там же, стр.392-3.

はるかに後退したことを知った。」

このように北東正面では独軍がリガを占領。リガからペトログラードまで、およそ570キロメートルしか離れていない。

同じころに起きたコルニーロフ事件の記述も行われている。南西方面軍司令官コルニーロフ（Корнилов, Лавр Георгиевич）将軍が、部隊とともにペトログラードに入ろうとした。臨時政府に代わる強い権力を打ち立て秩序を回復するためである。もっとも帝政を復興させることは目的ではなかった。

「8月29日火曜日 正餐后、次のような電報を読んだ。すなわち、コルニーロフ将軍は自らを独裁官と宣言したと、他方別のものは、彼は最高司令官の職務から更迭され、彼の代わりにクレムボフスキー将軍が任命されたとある。」

「9月5日火曜日 電報は当地に一日に二度到着する。多くのものは非常に不明確に書かれているので、信じることは困難である。ペトログラードにおいてある種の混乱、政府のメンバーの変更があったようである。コルニーロフ将軍の企図からは何も生じず、彼自身と参加した将軍や将校が大部分逮捕されたこと、他方ペトログラードに向かった部隊は引き返したようである。」

ケレンスキー首相とコルニーロフの関係は微妙であるが、日記に記されているように、最終的には前者は後者を更迭した。

まだこのころ兵士が当たり前のように、皇帝の居住区域に侵入することはなかった。そのためには何らかの理由が必要であった。例えば、ワインをめぐる騒動である。すなわち、皇帝に近いものがツァールスコエ・セローからもたらした品物の中にワインが入っていたことが見つかり、兵士たちのみならずトボリスク市民が騒ぎ出し、結局のところ、ワインを放棄せざるを得ないという事件が起きた。騒いだのは戦時の禁酒法に違反するからである。もっともワインは宗教儀式用とも思われる。

「9月25日月曜日 私たちの散歩時に警備司令官、コミサールの嫌な助手、陸軍少尉補ニコリスキーと3人の委員会の狙撃兵が、ワイン捜査のために私たちの館の部屋を調査した。／何も見つけずに、彼らは半時間後出

て行き去った。お茶の後で、私たちのところにツァールスコエ・セローから届いた品物が移動され始めた。」

10月25日、ペトログラードにおいて、ボリシェビキの武力による権力奪取がおこなわれた。この事件はその他の地域にも波及するはずであるが、まず起きたのは混乱である。

「11月4日土曜日　すでに2日間通信社の電報が届いていない—大都市においてきっと面白くない事件が起きているのであろう。」

「11月11日土曜日　大いに雪が降った。ペトログラードからはいかなる新聞も届かず、また電報も同様。この重苦しい時期にこれは気味が悪い。」

「11月17日金曜日　ペトログラードとモスクワにおいて2週間前に起きたことに関する新聞の記述を読むの憂鬱である！／内乱時代の事件よりもはるかにひどく恥辱的である。」

ボリシェビキの政権奪取は、「内乱時代の事件よりもはるかにひどく恥辱的」という評価をニコライから受けた。そのボリシェビキ政権は、ドイツとの即時講和を主張していた。この主張のために、彼らは兵士や一般民衆から支持されていた。権力奪取後ボリシェビキはこの実現に進もうとした。11月9日、人民委員会議長レーニン（Ленин, Владимир Ильич）は、前線に対して電報を発している。陣地の諸連隊は、敵との休戦に関する交渉に正式に入るための全権を直ちに選ぶようにせよと。

「11月18日土曜日　私たちの第5軍の3人の軍使が、ドヴィンスク前方のドイツ人のところに行き、彼らと休戦の予備条件に調印したというもっともありえない知らせを受けた！このような悪夢を私は全く予期していなかった。ボリシェビキというこの卑劣漢は、民衆の意見を尋ねず、敵により国の多くの地域が占領されたままで、講和締結という不愉快なことを提案し、彼らの秘められた夢を遂行するという厚顔無恥なことをどうしておこなえるのであろうか？」

前総司令官として独逸に対する戦争の継続を望んだニコライがこのような感情を抱くのは理解できる。ボリシェビキが民衆の意見を尋ねていないことを批判しているが、彼も客観的にみればそのようなことをしてなかった。だが主観的には、民衆の意見とは彼が抱いているドイツとの戦争

の勝利であると思い込んでいたのであろう。そしてそれゆえに、彼と世論との懸隔が大きかったことも理解できる。なお、休戦に関するドイツとソヴィエト政府代表との公式交渉は、11月20日ブレスト＝リトフスクにおいて開始された。

革命に伴う兵士の急進化が思わぬトラブルを引き起こしている。

「12月28日木曜日 以下のことを知り憤激する。私たちの親愛なるアレクセイ神父が、捜査に引きだされ、彼は今自宅で軟禁状態であるということだ。これが起きたのは、12月25日の祈祷のときに、女性輔祭が私たちを肩書付きで追善し、他方教会にはいつものように第2連隊の多くの狙撃兵がいたからである。このために、パンクラトフやその手先が関与し、大騒ぎになっているのである。」

この騒ぎのもとには聖職者たちが、礼拝の中において、前皇帝皇后を「陛下」という敬称付きで呼んだということである。このような聖職者たちの前皇帝に対する好意的な態度が、教会に居合わせた、前皇帝に好意を抱いていない兵士たちを怒らせたのである。アレクセイ神父の軟禁状態は、怒った兵士たちをなだめるための措置であり、それと同時に彼を護る手段でもあった。アレクセイ神父は1918年1月12日、軟禁から解放された。しかし彼が前皇帝たちに対して宗教的儀礼をつかさどることはなく、前皇帝たちも教会に行く回数を減らされることになった。

兵士の過激化はとどまることをしらない。

「1918年1月3日水曜日 狙撃兵部隊委員会は、肩章をやめると本日議決した。町で侮辱や襲撃を受けないためである。理解できない！」

もちろん、ここに書かれている理由以外に、肩章の廃止は軍における階級の廃止・民主化と関係している。秩序を重んじる皇帝は理解ができない。

検閲はあるものの離れ離れになっている家族との便りは、前皇帝の慰めである。1917年10月27日に「ママに書簡を書いた」という簡単な記録が日記にあるが、その時の書簡が残されている。

「…通例、私はタチティシヨフとともに薪をのこぎりで切ります。本日、新しい薪小屋の柱のため、狙撃兵とともに土地を掘りました。一人の狙撃兵は私をほめました。彼と私は、2個ではなく、4個の穴を掘ったか

らです！…食料は当地では素晴らしく、そしてたくさんあります。ツァールスコエ・セローとは大きな違いです。それゆえに私たちは皆トボリスクでは非常に健康回復し、体重が8-10ポンド増えました。…

…非常に多くのものを読んでいます。私にとっての素晴らしい作家の完全なリストを作ることを決意しました（英語とフランス語の本を読んでいます）！アレクセイとロシア史に取り組んでいます。私はそれが好きで、知識があります。子どもの残りの課業は、アリックス、ジリヤール氏、ギブス氏、E.A. シュネイデルとともにおこなわれています…¹⁶⁾」

母に心配かけないように、また検閲で削除されないように、生活の積極的な面を書いているのであろうが、とりあえず皇帝の日常がわかる。穴を掘るという肉体労働にいそしむ前皇帝の姿が印象的である。作業がなければ「庭を歩いたが作業はなし一本日はやるせないわびしさ！（1月2日火曜日）」という感慨を日記に記すまでになった。また自らの研鑽や子供の教育にも熱心に取り組んでいるのである。

外部からも書簡がもたらされる。マリア・フョードロヴナとともにクリミアに住んでいたニコライの妹クセニア（Ксения Александровна）からである。

「3月8日木曜日 愛しいママとモギリョフで別れて、ツァールスコエ・セローに去ってから1年。クセニアから書簡受領。」そしてその書簡の中では、社会の変化、土地の国有化が語られる。

「…アイ＝トドル〔クリミアの領地〕は、他の保護を失った人の領地と同様に「国有化」されました。ある素晴らしい日に、一人の御仁がきました。土地国有化に関するコミサル補佐であり、領地は私たちにもはや属していません、私たちのところに移住すると宣告しました。館から追い出されなかったのはまだ良いことでした！すべては楽しいことではありません。領地における従業者委員会が設立され、それがすべての案件を決定します！すべての蔵が封印され、銀行小切手などが没収されました。生活するのが困難で、お金がなく、食料品に関しても非常に悪質です！今後どうな

16) Там же, стр.397-8.

るか分かりません！それにもかかわらず、あなた方と同じように、意気消沈していません。神は、もっと幸福な日々が到来するようにさせるでしょう。「苦は楽の種」です。最悪なことは、恐るべき敵意と憎しみ、そして復讐の渴望です。一つの階級の他の階級に対するものです！¹⁷⁾

1918年1月終わりから、事態が変化し始めた。

「1月26日金曜日 部隊委員会の決議により、パンクラトフと彼の補佐ニコリスキーは、占めていた役職から解任され、コルニーロフ館も出て行った。」

兵士の一層の急進化の結果として、臨時政府が消滅したためにその立場が危うくなっていたコミサールB.C.パンクラトフと彼の補佐ニコリスキーは、24日、辞職届を出さざるを得なかった。時期を同じくして、前皇帝の警備を担当する兵士たちの動員解除が始まっている。前皇帝の警備体制が縮小されている。

「1月30日火曜日 朝の散歩時、故郷に去る私たちの知り合いの優秀な狙撃兵と別れの挨拶。彼らは現在の冬期に去ることを全く望んでいず、航路が開かれるまで喜んで残るであろう！」

経済的にも前皇帝の一家の生活は制約を受け始めた。

「2月14日水曜日 私たちの食料と従僕に対する費用を相当切り詰めざるを得ない。なぜならば式部職部門が3月1日から閉鎖され、それ以外に、自己資金の使用が月に600ルーブルの受け取りに制限されるから。最近、私たちは収支を相償わせる最小限を算出することに忙しい。」

「2月15日木曜日 この原因のために、多くの従僕と別れざるを得ない。なぜならば私たちと共にいるすべての人々を維持することを、私たちができないからである。当然のことながらこれは重苦しい。しかし必然だ。…」

「2月16日金曜日 この日から新しい切り詰められた体制での生活が始まった。」

17) Там же, стр.440-2. マリア・フォードロヴナとクセニアは、ロマノフ家にあっては例外的にイギリスに亡命することができた。マリアはそのちに故国デンマークに移り住む。

なお、1917年から1918年初めにかけて、最高人民会議において、前皇帝を裁判に引き渡す提案が行われている。もっともこの決定は先延ばしされている。

他方ボリシェビキ政権の対外政策は前皇帝を心配させている。

「2月7日水曜日、2月8日 電報から判断すると、ドイツとの戦争が再開された。なぜならば休戦期間が満了したからである。他方前線には次のもの以外何もない。動員解除された軍、運命のいたずらに放棄された武器と弾薬、攻撃する敵！恥辱と恐怖！」

すでに前年11月に休戦が決定していた。ブレスト＝リトフスクにおいてソヴィエトとドイツとの休戦交渉が開始されたのだ。しかし1918年2月、交渉が行悩み、休戦が破れた。トロツキーが、人民委員会議長の直接の指示に反して、ドイツの最後通牒を受け入れることを拒否したからである。もっとも、ニコライが示唆しているように、ロシア側の士気は上がらず、ドイツの最後通牒を受け入れざるを得ないことになる。

「2月12日月曜日 本日次のことを知らせる電報が来た。ボリシェビキ、あるいは自称するところでは最高人民委員会は、ドイツ政府と屈辱的条件で講和に同意せざるを得なかった。敵部隊が前進し、それらをどうしても食い止められなかったためである！悪夢！」

前皇太子家庭教師ピエール・ジリヤール（Gilliard, Pierre）は、後の1918年9月12-14日において、前皇帝一家殺害事件予審判事に対する証人陳述において次のように指摘している。「トボリスクにおける生活で、私は覚えているが、皇帝は、ブレスト＝リトフスク条約に関して新聞で読んから、非常に憤激して失望した。このときから、皇帝はさらに一層ロシアのために苦しんだように見えた。ドイツ人とボリシェビキの背信のために、皇帝は魂の限りに憤激したのだ¹⁸⁾。」

3月19日、モスクワの中央執行委員会はロマノフ家の扱いに関して決議をする。警備兵を置き換えるために、新しいコミサルとともに派遣する。前皇帝らをモスクワに連行することがその任務とされた。だが24日、

18) Там же, стр.437.

行き先がウラル（エカテリンブルク）と修正された。もっともそこは一時的滞り場所であり、将来的にはモスクワでの公開裁判が行われるはずであった。

「3月30日木曜日 本日コピリンスキーは、モスクワの中央執行委員会から私たちの部隊に対する昨日受領した文書をもたらした。あの館「通りを挟んだ向かいの建物」に居住している私たちのすべての従僕を私たちのところへ移動させるのである。つまり、私たちは、ツァールスコエ・セローにおけるように、逮捕されているとみなされるのである。…」

このような中、アレクセイの体調がおかしくなる。

「3月30日木曜日 アレクセイは咳のため、鼠蹊部が痛む。彼は一日中横になっている。」

「3月31日土曜日 彼は一晩中眠られず、日中はひどく苦しんでいる。かわいそう。」

前皇太子家庭教師ジリヤールは、ニコライの日記記述を補完している。

「アレクセイ・ニコライヴィチは、寝台に寝たままである。昨日から彼は、彼がおこなった努力のために、鼠蹊部に強い痛みを感じている。彼はこの冬は非常に調子よく感じていたのであった！これが重大なものでなければ良いが！¹⁹⁾」

4月9日、全権を持った新しいコミサール・ヤコブレフ（Яковлев Василий Васильевич）がモスクワからトボリスクに着き、翌日、前皇帝一家の前に現れる。彼はアレクセイの病気のことを気にしていることが注目される。4月12日、ヤコブレフは、警備隊長コピリンスキーとともに前皇帝の前に再び現れる。そしてニコライを安全な場所に移動させることを告げた。もっともどこに連れて行くのかは言わなかった。アレクサンドラはアレクセイの病状にもかかわらず、ニコライに付き従うことを決意した。ニコライを一人にしてボリシェビキにいいようにやられることが恐れられたのだ。彼女にとってはニコライ一人で退位を決断させたのが痛恨の極みであった。なお彼等は、プレスト＝リトフスク条約をニコライが是認させら

19) Там же, стр.444.

れることを大いに恐れていたのである。結局、ニコライ、アリックス、マリアが先行。残りの子どもは三週間後にヤコブレフが運ぶと約束した。

エカテリンブルク

4月13日午前5時、ニコライらはトボリスクを馬車隊で出発した。イルティシュ、トボル川に沿った道を南に進む²⁰⁾。14日の夜9時15分にチュメニ着、一行は列車に乗り換える。ヤコブレフは、エカテリンブルクのボリシェビキたちの前皇帝一家の安全確保に対する態度を恐れた。チュメニを発つ前に、列車の行き先を、西方のエカテリンブルクではなく、東方のオムスク方面に変更する許可をモスクワから得た。ヤコブレフはオムスクからは西進して、自分の故郷のウーファ近辺にロマノフ家の一族を留め置くことをもくろんだ。安全確保の観点から最良と考えたのだ。しかしエカテリンブルク側は列車の東進に怒り、オムスクの直前で列車を止めさせて、さらにエカテリンブルクの方に進めるようにしたのであった。全露中央執行委員会議長スヴェルドロフ（Свердлов, Яков Михайлович）は、ヤコブレフに対して、チュメニで「すべての荷物」をウラル地区委員会議長に引き渡すように命じるように方針転換した。17日、午前8時40分、列車はエカテリンブルクに着いた。皇帝一家は駅で手荒い歓迎を受けた²¹⁾。駅は皇帝を一目見ようとした群衆で混乱し、さらに引き渡し交渉が延引し、3時間ほど立ち往生した。結局、郊外の貨物駅に進み、前皇帝一行はエカテリンブルク側に引き渡された。

4月17日、居住することになった、接収されたブルジョアの住居（イパチェフ館）の様子をニコライは詳細に書き留めている。

「家屋は良く、清潔。私たちには四つの大きな部屋が割り当てられた。角の寝室、化粧室、脇の台所、庭を向いた窓があり、街の低いところが見

20) このときもラスプーチンの家の近くを通った。4月14日のニコライの日記によれば、「ボクロフスキー村で、馬の付け替えがあり、ちょうどグリゴリーの家の向かいに長く止まった。そして窓から顔を出している彼の全家族の顔を見た」。

21) Robert Service, *The Last of the Tsars*, London, 2017, pp.163-183.

える。そして最後に、ドアがなくアーチの付いた広大な広間。長い間自分の荷物を並べることができなかった。なぜならば、コミサル、警備司令官、警備将校たちが長持ちの検査に着手することができなかったからである。また後におこなわれた検査は税関のようなものであり、非常に厳格であり、アリックスの移動用救急箱の最後のビンにまで至った。これは私を激怒させた。そして私はコミサルに対してきつく自己の意見を述べた。ついに9時頃に決着した。ホテルからのもので4時半に正餐をとり、他方整頓してからお茶と共に軽食をとった。

次のように配置された。アリックス、マリアと私は3人で寝室、化粧室は共通、食堂には、H.デミドヴァ、広間には、ボトキン、チェモドウロフ、セドネフ。玄関付近に、警備将校の部屋。衛兵は、食堂付近の二つの部屋に配置される。浴室や洗面所に行くためには、衛兵部屋のドアにいる哨兵のそばを通る必要があった。館の周りに、窓から2サージェンのところに非常に高い板の塀が建てられていた。そこには一連の哨兵がいて、庭にも同様。」

整理された書き方ではないが、哨兵が配置された高い塀に敷地が囲まれていること。家屋内には前皇帝夫妻と娘のマリアやお付きのもの以外に、警備将校と兵士が常住していることが分かる。さらに持ち物検査の厳格さが、たいていは温厚なニコライを激怒させている。

外部とのやり取りも従前どおり厳格に管理される。

「4月24日火曜日 警備司令官アヴデーエフは、子どもたちに対する手紙のために三日前に作った家の平面図を押収し、それを自ら持ってきて、これを送ることはできないと述べた！」

上の記述からわかるようにニコライが子供の手紙に添付した平面図は、素直には受け取られなかった。アヴデーエフは、自己の回想録において、前皇帝はニコライ大公に宛てた書簡封筒の間に、家屋の平面図を隠したと話を捻じ曲げている。逃亡目的があったとにおわす記述をしているのだ²²⁾。

22) Дневник императора Николая II (1894-1918), Т.2, Ч.2., стр.455-6.

財産管理も始まった。4月27日の記述に次のようにある。「お茶の後で、「出目」[ウラル州執行委員会副議長デイドコフスキー]がやって来て、私たちすべてに対してお金がいくらあるのかを尋ねた。それから彼は正確な数字を書くことを求めて、それから余分なお金を地区ソヴィエト会計係のもとで保管するために持っていった！ものすごく不快な話である。」

このような管理強化の目的は明白である。5月1日の日記に警備司令官のあからさまな言葉が記されている。前皇帝に従った医師ボトキン散歩時間制限の理由を問うたことに対して、「監獄の体制に似せるためである」と返答されている。

忍耐強いニコライもこのような体制にうんざりしている。

「5月20日日曜日 …監禁されて座っていること、欲するときに庭に出ることができないこと、素晴らしい夜を外で過ごせないことは耐えがたい！監獄体制！」

前皇帝にストレスが発現した模様である。

「5月24日木曜日 一日中痔ろうの痛みに苦しむ。それゆえに寝台に横になっていた。なぜならば湿布を貼るのに都合がよいから。」

管理側は前皇帝一家の逃亡を恐れていた。窓を通じる外部との連絡を遮断しようとした。

「5月2日水曜日 『監獄体制』適用は継続、そして午前中に年取った塗装工が部屋における私たちの窓をすべて石灰で塗ったことが明らかになった。窓の中に霧を見ているようである。」

他方、ヤコブレフが約束した家族の再会は実現している。5月10日、アレクセイをはじめとする子供たちがエカテリンブルクに合流した。ニコライの感慨は深い。「4週間にわたる別離と不明確の後で、彼らに再びまみえて抱擁することはものすごい喜びである。…夜まで駅から寝台と必要な品物が運ばれるのを待った。しかし、かいがなかった。そしてすべての娘たちは床に眠らざるを得なかった。アレクセイはマリアのハンモックで夜を過ごした。夜は、当てつけるように、彼は自分で膝を傷つけて、一晚中苦しみ、私たちの眠りを妨げた。」

エカテリンブルクに到着したものの、アレクセイは不調で他のものを悩

ませるという事態になった。管理側もアレクセイの様子を確認に来ている。

「5月13日日曜日 アレクセイ以外は良く眠れた。彼の痛みは続いているが、大きな間欠を伴う。…最近いつもそうであるように、B.H.デレヴェンコがアレクセイの視察に来た。本日は彼に黒い御仁が付き添っていた。私たちは彼を医師と見た。」

ニコライが医師と見た人物は、のちに警備司令官に就き、最終的には一家殺害を執行することになるユロフスキー（Юровский, Яков Михайлович）である。彼は医療の心得があったのだ。アレクセイの体調はこののちも一進一退を続ける。

警備側では、ニコライの側から見ても規律にたるみが見て取れる。

「5月14日月曜日 私たちの窓の下歩哨が私たちの家に射撃した。なぜならば彼らには窓において誰かがうごめいたかのように見えたのだ（夜の10時以降）。私見によれば、いつも歩哨がやっているように、ライフルで遊んでいただけなのではないか。」

「5月21日月曜日 素晴らしく暖かい日。2度散歩。下の衛兵部屋で再び発砲。警備司令官が、弾が床を貫通したかどうか尋ねに来た。」

幸いなことに弾は床を貫通せず、被害はなかった。ニコライの所見はないが、兵士の発砲の原因は、不注意。遊底に安全装置をつけるときに発砲したらしい。

警備兵たちが前皇帝の財産を盗んでいたことも発覚し、それが原因となり警備隊長アヴデーフ（Авдеев, Александрович Дмитриевич）が更迭された。

「6月21日木曜日 本日警備司令官の交替が起きた。正餐時にペロボロドフ等がやって来て、次のように説明した。アヴデーフの代わりに、私たちが医師と認めていた人物、ユロフスキーが任命されたということである。日中、お茶の前に、彼は自己の補佐と共に貴金属の目録を作成した。私たちのものと子どものもの。大部分（指輪、腕輪など）を彼らは持っていった。次のように説明された。私たちの館において不愉快な話がかいてあるということである。私たちの物品の販売について言及されたのだ。かくして、私が5月28日書いた確信が裏書きされた。可哀そうなアヴデーエ

フ。しかし彼は、倉庫における長持ちからの自己の兵士が窃盗をすることを抑制しなかったという点で罪がある。」

警備司令官交代以前に、反ボリシェビキ勢力の襲撃を予想して警備陣が強化されている。5月17日、イパチェフ館の警護のために、近隣のズロカゾフ工場から、さらに29人の折り紙つきの赤衛兵が到着した。5月31日には、警備司令官から「アナキストの襲撃」が懸念されるので、出発の準備が指示されている。しかし出発は取り消された。

逃亡や襲撃を恐れるため、家屋の窓は閉めっぱなしである。

「6月9日土曜日 私たちの部屋において蒸し暑さはひどかった。夜はとりわけそうである。ボトキンの書面の請願により、私たちは一時間半の散歩が許された。本日、お茶の時間に6人の人間が入って来た—おそらくは地区ソヴィエトであろう。どの窓を開けるのかを検討するためである。この問題の解決は、2週間ぐらい延引している！しばしば種々の人間がやって来て、私たちのそばで黙って窓を眺めていた。」

この日、イパチェフ館を訪問したのは、北部ウラルシベリア方面総司令官ベルジン（Берзин, Р.И.）であった。彼はモスクワに次のように打電した。「家族の全成員とニコライ自身は生きていて、彼の殺害等に関するすべての知らせは、虚報である²³⁾。」と。ニコライ殺害報道が流れたために、モスクワはその確認を行わせたのである。

日記に示されている蒸し暑さを軽減するためにこののちに窓が開けられた。

「6月10日三位一体祭 昨日の訪問者が、ペトログラードから来たコミサルであることが判明した。室内の空気が清潔になり、夜までには非常に冷たくなった。」

前皇帝一家逃亡の試みの話に関しては次のような記述がある。

「6月14日木曜日 最近、私たちは、次々と2通の書簡を受領した。その中において、私たちは忠実なものにより奪還される準備が行われているということが私たちに知らされていた！しかし数日が過ぎ、何も起きな

23) Там же, стр.466-8.

かった。他方、予想や確信できないことは非常に苦しい。」

これらの書簡は、今日では、逃亡の証拠を作り出すための、チェカの陰謀であったとされている。前皇帝一家は積極的にはこれに応じなかったが、期待を寄せていたと解釈される。しかし、新しい警備司令官ユロフスキーにより、彼らの脱走の可能性が封じられた。

「6月28日木曜日 午前中10時半ごろ、開かれた窓に対して、3人の労働者が接近し、重い格子をもたらして、それを枠の外から固定した。ユロフスキーの側からの予告はなかった。この類のことは、私たちにとって最も好まれない！」

皇帝の最後の日記の記述は次のようなものである。

「6月30日土曜日 アレクセイが、トボリスク出発後最初の入浴をした。彼の膝は改善したが、しかし彼は膝を完全に伸ばすことができない。天気は暖かく快適。外部からの知らせはない。」

最後の記述は一般的に外部から情報が遮断され、幽閉された状況を描いていると考えられる。

結びに代えて

1918年7月17日の夜がまだ明けないとき、前皇帝一家と最後まで付き添った者たちは、イパチェフ館で、地元のポリシェビキにより銃殺された。その後死体は郊外に運ばれ、焼かれ、残骸が炭坑に捨てられた。前皇帝一家の処刑の原因は、接近しつつあるチェコスロバキア軍団の手に彼らを引き渡させないことであった。エカテリンプルクの独走ではなく、モスクワの承認もあったと推測される。さすがにモスクワは、前皇后や子女まで含めての処刑には口をつぐみ、ニコライだけが処刑されたと嘘を公表せざるを得なかった。さらに翌日の朝、エカテリンプルク近郊で、前皇帝弟のミハイル・アレクサンドロヴィチも同様に処刑されている。この後、チェコ軍団は、7月25日にエカテリンプルクを占領する。11月にはいわゆるコルチャック政権が樹立される。しかし1919年7月に、エカテリンプルクは赤軍により再占領されることになる。イパチェフ館は、1977年、当時

のスヴェルドロフスク州共産党第一書記ボリス・エリツィンにより破壊された。2003年には、その地に血の土教会が設立されている。

冒頭に記したようにニコライ日記の特徴は簡潔さであった。ただ、退位後の思考のために時間的に余裕がある時期においては、日々の暮らしに関する記録はそれなりに充実していた。ニコライが妻を思い、子供たちのことを配慮して、また離れ離れになった親類と連絡を取り合いながら、淡々と日々の作業をこなし、夜の団欒では朗読をするなどして、拘禁生活をやり過ごそうと努力した跡が十分にうかがえる。彼がよき家庭人であったことは間違いない。

また外からの情報もできる限り入手し、ニコライが、対独堯戦争の勝利を望み続けていることも分かる。それゆえにブレスト＝リトフスク条約にひどく落胆しているのもであり、ポリシェビキが、その承認のプロセスに彼を巻き込もうとすることをひどく恐れていたのも見て取れる。

ただし、彼の日記からは、退位に至る原因が何であったのかという真剣な思考が読み取れない。彼は自分の意見を明確に言わなかった人間で、ずいぶん側近にも誤解を与えたことで知られている。ニコライに意見ををして、十分に傾聴されたと思われた直後に解雇された閣僚もいた。彼が自分の日記にも何も示さなかったのは当然かもしれない。対照的に、2月革命直前まで、彼は専制の原理を妥協なしに維持しようとした。政治とは妥協の技術であれば、彼には政治的才能が欠けていたのかもしれない。父から受け継いだ帝政を息子にそのままの形で継承させることを願っていただけなのかもしれない。

さらに彼が革命の前兆に対してきわめて鈍かったことも注目に値する。世界大戦に対する関心から明らかなように、また彼が大変まじめで大臣の報告を熟読したことから窺えるように、情勢に無関心であったわけではなかった。帝政ロシアにとって厳しい状況の中、甘言を弄する側近の楽観的な報告に惑わされていたと言うほかない。

また彼には意志がなく、アレクサンドラ、ひいてはラスプーチン等に操られていたという悪評が立ったことも示したとおりである。この点では彼は革命後には彼女をひたすらかばっている。しかしアレクサンドラの政治

介入の実際はどのようなであったのかという問題は私にはまだ残されている。第一次世界大戦期、それも彼がニコライ大公を解任して、自ら総司令官に立った以降のプロセスの分析が必要とされる次第である。

会員業績

(2016年10月～2017年9月)

尾崎 庸介

- 論 文 (単著) 「巨文島事件をめぐるイギリスの東アジア政策 (I) -1880年代の東アジア国際政治とバランス・オブ・パワー-」、『政治経済史学』596号、2016年8月
- 論 文 (単著) 「巨文島事件をめぐるイギリスの東アジア政策 (II) -1880年代の東アジア国際政治とバランス・オブ・パワー-」、『政治経済史学』597号、2016年9月

小林 泉

- 論 文 (単著) 「天皇のパラオ訪問と南洋群島の再考察」、『太平洋諸島研究』No.5、太平洋諸島学会、2017年8月
- シンポジウム (モデレータ・コメンテータ) 「太平洋島嶼国と日本外交」、国際機関太平洋諸島センター主催、於：明治大学アカデミーコモン、2016年12月6日
- シンポジウム (パネラー) 「太平洋島嶼国と日本の認識ギャップを探る」、笹川平和財団主催、於：財団国際会議場、2017年6月13日
- シンポジウム (モデレータ兼発表者) 「海洋環境を巡る国際関係」、太平洋諸島学会・研究大会、於：東京大学・小柴ホール、2017年7月8日
- 評 論 (単著) 「今こそ謳え、高らかな太平洋ドクトリン」、『パシフィック・ウェイ』No.150、太平洋協会刊、2017年8月
- 評 論 (単著) 「仏領のPIF加盟、変化への対応が必要」、『パシフィックウェイ』No.149、太平洋協会刊、2017年2月
- 講 座 明治大学講座「決断迫られる日本の太平洋諸島外交」、於：駿河台キャンパス、2017年5月27日
- 講 座 JICA 講座「サモアの政治経済動向」、於：JICA 国際協力研究所、2016年10月4日
- 講 座 JICA 講座「サモアの社会構造」、於：JICA 国際協力研究所、2016年11月8日
- 調 査 バヌアツ共和国・フィジー共和国「JICA広域援助に関する評価調査」、JICA委託研究事業、2017年3月4日～3月15日

根無 喜一

- 講 演 「中国の海洋進出：地政学的意味」、岸和田ロータリークラブ〔泉州の明日を考える会〕、於：岸和田市沼町天神社会議場、2016年9月15日

広野好彦

講演 「18歳の君へ～いま投票する意味～」、吹田市明るい選挙推進協議会・吹田市選挙管理委員会主催「白バラ講座」、於：大阪学院大学、2017年8月8日

松本芳明

論文 (単著) 「「スポーツ学」を考える」、『スポーツロジ』第4号、みやび出版、2017年4月、10-23頁

三上敦史

論文 (単著) 「躍動するインドの財閥と新興勢力～そのプロフィール～」、『日印文化』(インド共和国第70回独立記念特集号)、関西日印協会、2016年12月1日、35-43頁

三輪信哉

論文 (単著) 「地球温暖化授業のための資料(1) 地球温暖化の原因、現状と将来」、『大阪大学通信』第47巻7号、大阪学院大学通信教育部、2016年10月、379-401頁

パネルディスカッション (司会)、くるくるフォーラム2016「食品ロスについて考える」、於：千里市民センター大ホール、2017年3月11日

山口 悟

講座 「分裂と統合のヨーロッパの歴史」、大阪学院大学生涯学習講座、2017年7月22日

講座 「日英講座Ⅰ」、兵庫県阪神シニアカレッジ国際理解学科、於：尼崎市中小企業センター、2017年5月9日

講座 「日英講座Ⅰ・Ⅱ」、兵庫県阪神シニアカレッジ国際理解学科、於：尼崎市中小企業センター、2017年10月20日

和中幹雄

論文 (単著) 「「日本目録規則 (NCR) 2018年版」(仮称) へのコメント」『資料組織化研究-e』、図書館資料組織化研究会、No.70、2017年4月、27-48頁

研究集会発表 (単独) 「「日本目録規則 (NCR) 2018年版」(仮称) への期待と要望」、日本図書館協会目録委員会・大阪市立中央図書館主催「「日本目録規則 (NCR) 2018年版」(仮称) 関西検討集会」、於：大阪市立中央図書館、2017年3月5日

大阪学院大学国際学学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学国際学学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、国際学すなわち政治、経済および文化の国際的視野における研究を通じて、日本の進展と世界との交流に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学国際学論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で、本会の趣旨に賛同する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の事業に参加し、本会の機関誌その他の刊行物の配布をうけることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選を妨げない。
1. 会長 1名
 2. 副会長 1名
 3. 庶務委員 2名
 4. 編集委員 4名
- 第8条 会長、副会長ならびに委員は会員の選出とし、総長がこれを委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。
- 第12条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金、その他の収入をもってあてる。
- 第13条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。本連合に関する規程は別に定める。
- 第14条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。
- 第15条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認を得るものとする。

附 則

1. この会則は、平成2年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成5年4月1日に改正し、施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日に改正し、施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日に改正し、施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日に改正し、施行する。

以上

CONSTITUTION OF THE INTERNATIONAL STUDIES ASSOCIATION OF OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

- Article I. The name of this association shall be the International Studies Association of Osaka Gakuin University, hereinafter referred to as ISA.
- Article II. The office of ISA shall be located in the library of Osaka Gakuin University.
- Article III. The purpose of ISA is to contribute to the development of Japan and its relations with the world, through research in international studies, that is, research in politics, economics, and culture from an international perspective, in accordance with the founding principles of this university.
- Article IV. ISA shall conduct the following activities:
1. Publish a journal, *International Studies: the Journal of the International Studies Association of Osaka Gakuin University*.
 2. Hold study meetings, lectures and forums.
 3. Other activities necessary to fulfill the objectives of the organization.
- Article V. Membership in ISA is open to:
1. Full-time faculty members of Osaka Gakuin University and Osaka Gakuin University Junior College who support the objectives of ISA.
 2. Any other person who supports the objectives of ISA and is approved by the Executive Committee.
- Article VI. Members are eligible to participate in ISA activities and receive the journal and other ISA publications.
- Article VII. The officers of ISA shall be a President, a Vice President, two executive secretaries, and four editorial staff. The term of office shall be two years, and reelection to office shall be permitted.
- Article VIII. The officers shall be elected by and from the membership of ISA, and commissioned by the Chancellor of the university.
- Article IX. The President shall represent ISA and supervise its affairs. The Vice President shall assist the President. The officers shall form an Executive Committee to administer the association and plan its activities.
- Article X. The President shall summon and preside over meetings of the Executive Committee.
- Article XI. The general assembly of ISA shall be held once every academic year. The President may also call special meetings when necessary.
- Article XII. The expenses of ISA shall be met by grants from Osaka Gakuin University, donations, and other income.
- Article XIII. Liaison with other academic societies shall be maintained through the *Federation of Academic Societies of Osaka Gakuin University (Osaka Gakuin Daigaku Gakkai Rengō)*.
- Article XIV. The fiscal year shall begin on April 1 of each year, and end on March 31 of the following year.
- Article XV. This constitution may be amended by motion at a general assembly, to be approved by the Chancellor.

大阪学院大学国際学論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は国際学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格者は、原則として本学国際学学会の会員に限る。ただし、次の場合は会員でない者も役員会の議を経て掲載することがある。
 - (1) 本会会員と共同執筆の者
 - (2) 本会会員の推薦がある者
 - (3) 本学大学院博士課程の院生で、指導教員の推薦がある者
3. 原稿用紙は本学の200字詰用紙を原則として横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。また、ワードプロセッサ等による原稿の取扱も字数においてこれに準ずる。
 欧文の場合は原則としてタイプ用紙に30行で30枚とする。
4. 原稿は、
 - ア. 論説
 - イ. 研究ノート
 - ウ. 資料
 - エ. 書評
 に区分して投稿し、いずれにも必ずレジメ（英語、独語、仏語のどれかに依るもの）を付けることとする。但し、外国語で書かれた論説・研究ノートの場合は、日本語のレジメも可とする。
5. 論説および研究ノートについて査読を行い、掲載の可否については編集委員会が決定する。なお、出版時には原稿受理および掲載決定の日付を明記する。
6. 発行は原則として、前期と後期の2回とし、6月、12月とする。年間ページ数は450ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、それを超えて希望する場合は編集委員会で超過分の額を決める。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。
 なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成25年4月1日から適用する。

大阪学院大学国際学論集執筆要領

1. 原稿は最終稿とし、校正の段階でページ替えとなる加筆や削除をしない。
2. 邦文原稿の挿入欧文は、ワードプロセッサ等に依るか、明瞭な活字体で書くかする。
3. できるだけ現代かなづかいと常用漢字を用いる。
4. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
5. 脚注はまとめて本文の末尾に置く。
インデックス番号は上つきとして片括弧〔例・・・4〕を用い、通しナンバーとする。
6. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示する。説明文は別紙にまとめる。
7. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は、厚手の台紙に貼りつけて、希望の縮尺を記入すること。
8. 執筆者校正は3校までとし、何校目かを朱筆する。3校以前で校了してもよく、その場合は責了と朱筆する。
9. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるので特に注意されたい。
ア. 校正の際、内容に大きな変更を来たさないものの、やむをえず組み換えがなされたとき
イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわったとき
10. 原稿の提出期限は原則として3月末と9月末とする。
11. 原稿の提出先は編集委員宛とする。
12. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し出て受け取る。

以上

平成29年度 大阪学院大学国際学学会会員

伊 田 行 秀	井 上 専	S. ギャニール
黒 田 泰 司	小 林 泉	佐 古 丞
島 岡 宏	N.M. シャクルトン	白 井 元 康
瀬 岡 誠	瀬 川 真 平	藤 田 恵美子
安 田 一 之	吉 田 正 岳	和 中 幹 雄

(50音順)

大阪学院大学国際学学会役員

会 長 根 無 喜 一	編集委員 尾 崎 庸 介
副 会 長 広 野 好 彦	近 松 明 彦
庶務委員 中 則 夫	三 輪 信 哉
松 本 芳 明	山 口 悟

執筆者紹介(掲載順)

尾 崎 庸 介 (国 際 学 部 講 師)
 広 野 好 彦 (国 際 学 部 教 授)

国 際 学 論 集

第28巻第1・2号

2017年12月31日 発行

発行兼編集者

大阪学院大学国際学学会

代表 根無 喜一

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号 phone 06-6381-8434(代)

印 刷

大枝印刷株式会社

〒564-0031 大阪府吹田市元町28番7号 phone 06-6381-3395

INTERNATIONAL STUDIES

VOL. 28, NO.1, 2

DECEMBER 2017

Contents

Articles

- The Acquisition of Strategic Bases and Britain in East Asia during the
Late Nineteenth Century: A Comparison of the Occupation of Port
Hamilton and the Lease of Wei-hai-wei
..... OZAKI YOSUKE — 1
- The Diary of Nicholas II, 1917-1918
..... HIRONO YOSHIHIKO — 25

Publications and News of the Members 65

**THE INTERNATIONAL STUDIES ASSOCIATION
OF
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY**